

41739

教科書文庫

4

810

44-1938

20000
46693

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

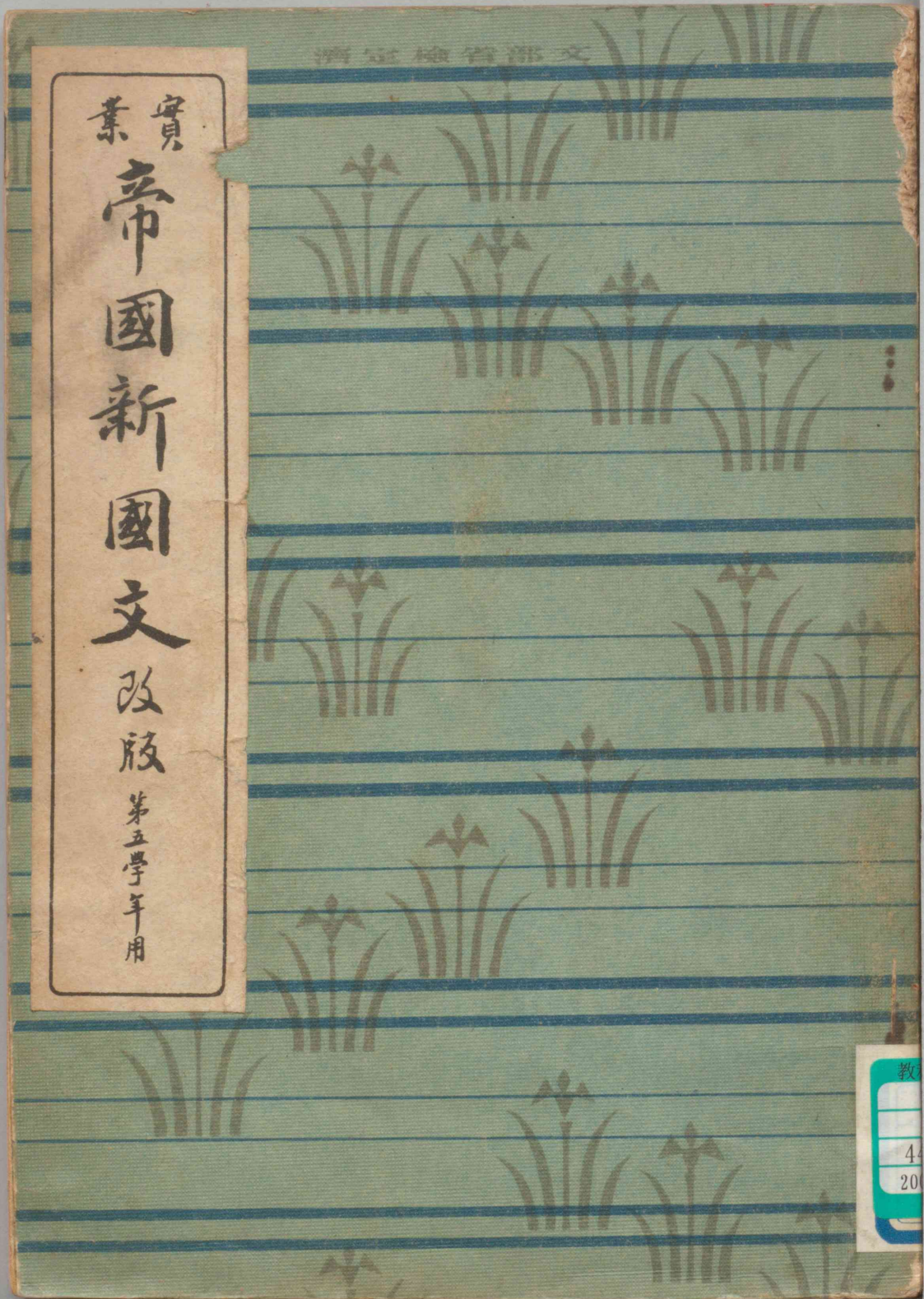
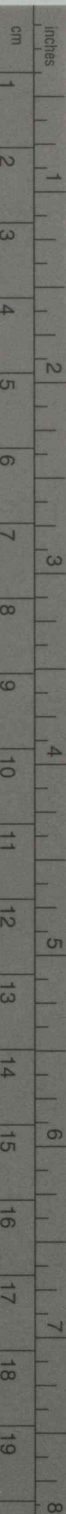


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省検査定済

實業

帝國新國文

改版

第五學年用

教

4
20



教科書文庫
4
810
44-1938
2000302786



子王二び及子太德聖

濟定檢省部文
科語國校學業實 日四十二月一年三十和昭

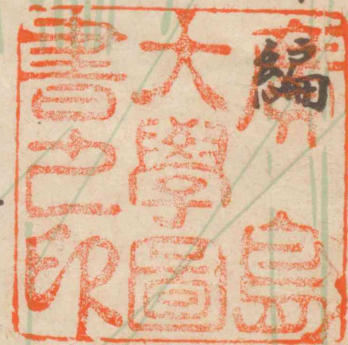
275.9
Fu10

資 料 室
業 實

帝國新國文

改版 第五學年用

文學博士 藤村作



株式會社 帝國書院



實業帝國新國文 改版 第五學年用

目次

一	國文學の現代的意義	藤村	作	一
二	希望	中村孝	也	七
三	落花の雪	（太）平	記	一一
四	日本國民の特色	藤岡東	圃	一七
五	幻住庵の記	松尾芭蕉	蕉	二三
六	芭蕉の生活	藤村	作	二八
七	松の手入	里見	淳	四三
八	寂光院	（平）家物	語	四八
九	平家雜感	高山樗牛		五六

目次

広島大学図書

2000302786



一〇 わが家の庭
 〇 一一 子規におくる書
 一二 橘曙覧の歌
 〇 一三 獅子ヶ城
 一四 巢林子の藝術
 一五 出廬
 〇 一六 隅田川
 一七 海外發展の要諦
 〇 一八 秩父むら山
 〇 一九 萬葉集の旅の歌
 〇 二〇 おのが物まなび
 二一 沼地
 二二 風雅論
 二三 貧生獨夜

中 勘 助 六三
 夏 目 漱 石 六八
 正 岡 子 規 七三
 近 松 門 左 衛 門 八六
 藤 村 作 九八
 土 井 晚 翠 一〇六
 一〇九
 後 藤 新 平 一一九
 一二八
 佐々木 信 綱 一三二
 本 居 宣 長 一三九
 芥 川 龍 之 介 一四四
 德 富 蘇 峯 一五〇
 與 謝 蕪 村 一五五

二四 狩野芳崖
 〇 二五 道長の膽力
 二六 世間を恐るな
 〇 二七 舟 路
 二八 現代と古典文學
 二九 日本民族の純眞性
 三〇 坐 り

岡 倉 覺 三 一五七
 大 鏡 一六五
 夏 目 漱 石 一七〇
 王 佐 日 記 一七三
 藤 村 作 一八〇
 河 野 省 三 一八九
 山 本 有 三 一九三



一 國文學の現代的意義

藤村 作

我々の思想や生活は時代と共に新しく移つて行くものである。又變化して行かねばならないものである。併し全然新しくなるものと思つたら又大きな誤であらう。我々は傳統の影響を受けることが甚だ多いものである。自分自らは新人と稱し、新しい生活をなしてゐると誇つてゐる人でも、存外多く古い傳統を受けてゐるものである。唯さう氣づかずゐる人が多いだけである。その傳統の中にはこれを後世から批判すれば、よいものもあれば、つまらぬものもある。所謂玉石混淆の有様である。それで、知らずにつまらぬ傳統の拘束を受けてゐる人もあるのである。又よい傳統を受けてゐる人にも、自覺的でない爲に、自然これを伸ばして行く力の強くないことを見るのである。

普通教育の上で國語教育・國史教育を重んずる理由は外にもあるが、その主なるものは、自國の國民性・國民精神に自覺を持たせることに在ると考へる。歐米の他國・他民族から彼の長を採つて我の短を補ふといふのは、明治維新以來の我が政治の大方針の一であるが、これはこれ迄の處極めて大切な事であつたのである。そして決して生活の外面のことにのみ限られてはならないことである。採長補短は國民性・國民精神の上までも及ばねばならぬことと考へられる。一國民の國民性なり國民精神なりを、その古來のまゝに石の如く固まつたもの、絶對のものとして考へてはならない。これには變遷もあり得べきものであり、又意識的に改善を企つべきものである。唯併しながら、その中にはその國民に取つて變化改造を許さない絶對的・根本的なものがある。それはその國民の特徵・長所となつてゐるものであつて、それを涵養して行くことは

最も大切であることを忘れてはならない。今日世界の強國を成してゐる國民を見るに、これ等の國民の偉大をなし來つた根柢は、その國民の持つてゐる特殊な性格の少數の長所を發展させて來たものであると信ぜられるのである。それが衰へる時、その國民は衰へ、それを多く失ふ時、その國は滅亡すると思はれるのである。言ひかへれば、採長補短の道に由つて國民性を養育・改善し、國民精神を改良して行くことは肝要であるが、古來傳へ來つて、今日特異なる國家を成し國民團結の基となり、國民文化を作り上げる上に與つて最も必要であつた國民性の長所を磨き立てて、その光を益發揮させることは決して忘るべからざることである。

この國民性の自覺といふ上に最も役立つのは國文學ではあるまいか。國文學を國史と相提携させ相助けしめて、これを國民の間に普及して行くことに由つて、この國民性の自覺が成されると

思ふ。何となれば、國文學といふものは、國民自身が畫いた自家の影像であり、自己の傳記である。そして偽らざる内面生活の告白である。偽らざる告白なるが故に、道德の標準から見れば必ずしも善とされるものとも限らず、惡とされるものまでもその儘に表してゐることが多い。そこに動もすると文學が社會から嫌はれる理由もあるけれども、亦それによつて國民生活、國民精神の真相を見詰むるを得る便の頗る大であることを考へねばならぬ。この眞の相を見詰むるといふことが、我々が日本國民としての自覺を得る第一歩であると思ふ。

かう考へて來ると、我々が今日に生れ合せて、遠い千幾百年來の國文學を知らうとし、これを研究するといふことは、唯過去の爲に過去を知り、過去の爲に過去を研究せんとする道樂でもなく、遊戯でもなく、物好きでもなく、今日の我々の必要の爲であり、我々自身

の生活の爲であるのである。我々が國民性、國民精神の理解と自覺によつて、國民としての生活の一步一步を確乎としたものに、充實したものにし、力強いものにした爲である。我々が日本國民として、拜外の夢に迷うて何の爲に生きてゐるかわからないやうな、あやふやな弱い生活から脱して、強い國民的自信を持つ生活を得たいといふ當然の要求の爲である。

又我が社會思想の惡傾向に就いて考へても、政治家の立場からすれば、一方にはかゝる惡思想を生み出す社會制度を改善し、社會事業を起すと共に、他方には直接にかゝる思想の蔓延を防遏する方法を取るといふより外に方法はないと考へられる。これを學問教育といふ立場から見れば、一方にはかゝる異端邪説があればその僻説、邪説を説破し説服すると共に、他方には歴史傳統の中から自然に國民の進むべき正しい道を見出させるやうにすること

が肝要である。それには自國の歴史と自國の文化とを精しく見て、正しく解することが必要である。さうして自國の國體と國民性とに自覺を持ち、自國の國民精神に深い親しみを有つやうにすることが必要である。今の我が國民は餘りに自分の國の事を知らな過ぎる。國民の思想精神の榮養をよくし、豊にして、國家の身體全體を強壯にするといふ方に努力しなければ、この宿弊は癒らないと考へられるのである。それには國文學が最も多く役立つと思ふのである。國民が進んで直接に萬葉集を讀み源氏物語に親しみ、神皇正統記を見、近松に親しむやうになれば、その中から自然に受ける感化は決して小さいものではあるまいと思ふ。期せずして受くる文學の思想的又道德的感化といふものは、決して道德や哲學書のそれに劣るものではないと信ずるのである。

— 日本文學聯講 —

二 希望

中村孝也

中村孝也
群馬縣の人
文學博士
史料編纂官
東京帝國大學助
教授

一 希望

あゝ、日はのぼる。
見わたす限り、はてしも知らぬ青海原、
浪は燃え、雲は輝き、
光明燦として、大天大地に照映する。
壯んなるかな、無象の天軍。
齊しく擧ぐる歡呼の聲の勇ましき。
ひとり巖上に屹立して、
この大光景に對すれば、
邁進の希望躍如として脈管に漲る。

あゝ、日はのぼる。

とこしへの青年よ、

双脚しかと大盤石を踏まへ、

双手を高く天半にかゝけて、

心ゆくばかり

大宇宙の靈氣を呼吸する爽かさ。

胸は膨らみ、

筋肉は隆々として勇氣に満つ。

見よ、現實は脚下に在り。

寄せては碎くる磯浪の、

不斷の争鬭を微笑に迎へて、

眼は遠し無限のあなた。

久遠の生命の流れ流るゝところ、

希望の國土理想の憧憬、

あゝ、若き生命にとこしへの祝福あれ。

二 晚鐘 (ミレエの名)
畫に題す

日は暮れる、廣野のあなたに

夕映の色がしだいに薄れてゆく。

鋤きかへされた黒い土のうねりを

凝然と眺め入る若い心の底に、

清水のやうに悦ばしさが湧く。

軽く快い疲勞を慰め顔の、

妻のすがたのかひがひしさ、

劬りがちに家路を見かへる時、

ミレエ
佛蘭西の人
畫家
(西紀八四一—八七五)

野もせを遠くさながら夢のや
うに
漂ひ來る聖なる鐘のひびき。
若き二人の胸のなかに、
現し世ならぬふる里の思ひ出
が明るく
香ぐはしくなつかしくめぐつ
て來る。
どこからともなく聞える囁き
の聲。
白い光が匂ふ、それは神のみ國。



(筆 エ ン ミ)

鐘 晩

みどり兒のやうな甘い悦びに満ちて、
かたみに祈る合掌のつつましき。
鐘のひびきはその魂を柔かに包んで、
夕ぐれの静けさをなみだたせながら、
帝座のあなたに遠くのぼつてゆく。

—修養文藝名作選—

三 落花の雪

(太 平 記)

俊基朝臣は先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉ま
で下り給ひしかども様々に陳じ申されし趣げにもと赦免せられ
たりけるが、又今度の白狀どもに、専ら隱謀の企かの朝臣にありと
載せたりければ、七月十一日に又六波羅へ召捕られて關東へ送ら
れ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも
許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば

落花の雪

またやみん交野
のみ野の櫻狩花
の雪ちる春の曙
新古今集(藤原俊成)

嵐の山

嵐山
朝まだき嵐の山
の寒ければ紅葉
の錦着ぬ人ぞな
き(拾遺集)

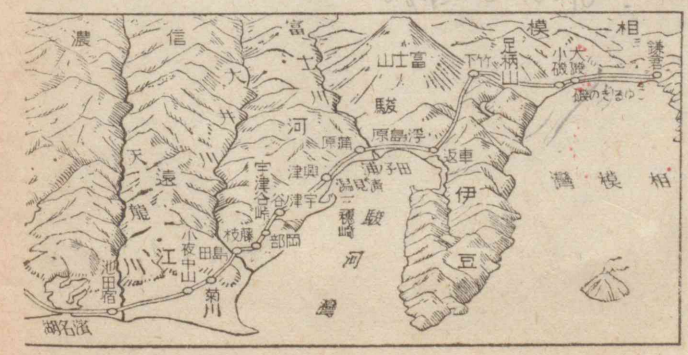
逢坂の關

近江國
逢坂の關の清水
に影見えて今や
引くらむ望月の
駒(拾遺集)

離れじと思ひまうけてぞ出でられける。

落花の雪に踏迷ふ交野の春の櫻狩紅葉の錦を着て歸る嵐の山
の秋の暮一夜をあかす程だにも旅寝とな
れば物うきに恩愛の契淺からぬわが故郷
の妻子をば行方も知らず思ひ置き年久し
くも住み馴れし九重の帝都をば今を限と
顧みて思はぬ旅に出て給ふ心の中ぞあは
れなる。

憂きをばとめぬ逢坂の關の清水に袖濡
れて末は山路を打出の濱。 沖を遙かに見
渡せばしほならぬ海にこがれ行くみをう
き船の浮き沈み。 駒もとゞろと踏みなら
す勢多の長橋打渡り行きかふ人にあふみ

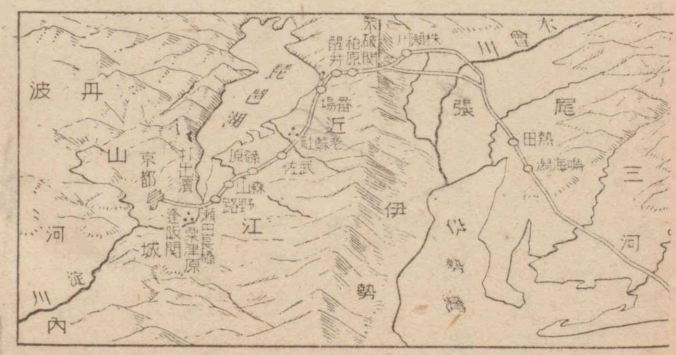


逢坂の關の清水に影見えて今や引くらむ望月の駒(拾遺集)

不破の關
美濃國不破郡
三關の一

ぢや世をうねの野に鳴く田鶴も子を思ふ
かとあはれなり。 時雨もいたくもり山の
木の下露に袖ぬれて風(風)に露散る篠原や篠
分くる道を過ぎゆけば鏡の山はありとて
も涙に曇りて見えわかず。 物を思へば夜
の間にもおいそのもりの下草に駒を留め
て顧みる故郷を雲や隔つらん。

番場醒ヶ井柏原。 不破の關屋は荒れは
てて猶もるものは秋の雨。 いつかわがみ
のをはりなる熱田の八劍ふし拜み汐干に
今やなるみがた。 傾く月に道見えて明け
ぬ暮れぬと行く道の末は何處ととほたふみ濱名の橋の夕汐に引
く人もなき捨小舟沈みはてぬる身にしあれば誰かあはれとゆふ



さよの中山
遠江國小笠郡日
坂村と菊川との
間にある山路



池田の宿 (筆丘映岡松)

ぐれの晩鐘鳴れば今はとて池田の宿に着き給ふ。
旅館の燈幽かにして雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を

りけり」と詠じつゝ、二度越えし跡までも羨ましくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日巳に亭午にのぼれば、餉進らする程とて輿
を庭前に早きとむ。轆を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を
問ひ給ふに、「菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戦の時院宣書
きたりし咎に因りて、宗行卿關東へ召下されしが、此の宿にて誅せ

命なりけり
年たけて又こゆ
べしと思ひきや
命なりけり小夜
の中山(新古今
集)

宗行卿
中御門中納言藤
原宗行

られし時

昔、南陽縣、菊水

汲下流而延齡

今、東海道、菊川

宿西岸而終命

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやい
とまさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の

おなじながれに身をやしづめん

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の

嵐の山の花ごかり、龍頭鶴首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしこ
とも今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。島田・藤枝に

かゝりて、岡邊の眞葛末枯れて物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え
行けば、蔦かづらいと茂りて道もなし。昔業平の中將の住む所を
覓むとて、東の方に下るとして、夢にも人に逢はぬなりけり」と詠みた

業平
在原業平
在五中將と稱ふ
平城天皇の御子

阿保親王の第五子
歌人
夢にも人に
駿河なる宇津の
山邊のうつつに
も夢にも人に逢
はぬなりけり
伊勢物語
上なきおもひ
富士の嶺の煙は
なほぞ立ちのぼ
る上なきものは
おもひなりけり
(新古今集)

りしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守にいと涙を催され、向ふはいづこみほが崎。興津浦原打過ぎて富士の高嶺を見たまへば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見えて浮島が原を過行けば、汐干や浅き船浮きておりたつ田子のみづからも浮世をめぐる車返。竹の下道行きなやむ足柄山の峠より大磯・小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着きたまひけれ。その日やがて南條左衛門高直請取り奉りて、諏訪左衛門に預けらる。一間なる處に蜘蛛手きびしく結うて押籠め奉るありさま、只地獄の罪人の十玉の廳に渡されて、頸枷手杻を入れられ、罪の輕重を糺すらんもかくやと思ひ知られたり。



藤岡東圃
名は作太郎
金澤市の人
國文學者
文博士
明治四十三年歿
(年四十一)

山
洞
高
く
壁
を
築
い
て
外
犯
す
べ
か
ら
ず
内
糸
る
べ
か
ら
さ
る
強
固
な
る
國
民
は
養
成
せ
ら
れ
た
り
。

四 日本國民の特色 團結

藤 岡 東 圃

日本國民の最大の特徴は團結の強固なるにあり、全一體として相離れざるにあり。小にして家を成し、大にして國を成し、家族は團欒して一人の如く、國家は和諧して一家の如し。支那の東海を縫うて、しかも大陸と離れたる大洋の中、超然なる仙洞高く、墻壁を築いて、外犯すべからず、内糸るべからざる強固なる國民は養成せられたり。而してこの國民はかけまくもあやに畏き現つ御神を上に戴き奉る。楫なき舟は行方を知らず、主腦なき團體は蜘蛛の子と散るべき鳥合の衆なり。國民にはこれを導くべき理想の光なかるべからず。現つ御神は赫耀として千秋搖ぐことなき大光明と申すも畏あり。一道の靈光脈々として古今に涉り、仰望せる國民は精髓をこゝに養ひ、理想をこれに求めて活動す。大君いま

してその下に國あり、連綿たる皇統こゝに三千載、遡つて神代史上
天岩屋戸の神話を思へば、動きなき教訓は儼として存す。

神代の昔、素戔嗚尊同胞の親に乗じて、君臣の別を辨へず、暴威を
振ひて天照大神を苦しめ奉る。大神これを厭ひ、天岩屋戸を閉ぢ



天岩屋戸 (小堀綱音筆)

て籠りま
す。天に
懸つて國
土を照す
光明影忽
ち消えて

黒闇々の中、民衆何を便に動くべき。隙を覗ひて禍つ神は五月蠅
なす涌き出で、紛擾亂雜開けたる國家は復混沌の世に歸らんとす。
八百萬神天安河原に集ひて熟議し、心を一にし、力を合せて、更に天

日の照臨を祈る。憧憬の後に希望あり。山の如き岩戸は開けて、
瞳々たる旭日天地を別ち、是非を明らめ、民衆その光明に浴して、各
自の分を盡くすを得たり。歴代の聖帝は即ち不窮の後に天祖の
神靈を體現し給ふもの、天つ日嗣の御名は國民が古今に通じて至
運發展の教化を仰ぐところの目標とまします。普天の下、率土の
濱、王土、王臣にあらざるなく、常燈上に輝き、國民その下に協同一致
して、一定の理想あり。一定の理想を追うて進めば、人をして極端
に奔り、邪路に陥るを得ざらしむ。草も木もわが大君のものなる
に何處か鬼のすみかなるべきぞ。理想の光は空假の終ることな
く、現實は時々刻々にこれに向つて近づかんとすれば、國民は希望
に充ち、現世を虚偽罪惡の巷として厭ふことなく、樂觀的に人世を
觀じ、世間的活動を以て人間の務とす。上に萬世不滅の皇統あり。
金甌無缺の國體はその國民をして無限力を發揮せしむべし。

草も木も
草も木もわが大
君の國なればい
づくか鬼のすみ
かなるべき
(紀朝雄)

日本の社會は一の大なる家族たり。君は專制の君にあらず、民は不平の民にあらずして、國家は即ち父子、夫妻、兄弟を廓大したるものなり。日本上古の風、所謂族制政治を以て成り、家族と國家と緊密なる關係あり。二者に大小の差別ありといへども、その本は一物なり。歴史ありてこのかた、聖皇を仰ぐ制と家族相親しむ制とは合一して、日本の社會を構成したり。而して盡未來際國民がわが大君を拜み仕へまつるがごとく、家族の親睦も一代を限りてのことにあらず。一代を限れる家族は強固に結合したる家族と稱すべからず。わが家族は一系の氏姓永く過去未來に涉りて動かず。國家に天祖あるが如く、一家にまた氏神あり。氏神は即ちその家を開ける祖先を祀れるなり。代々の子孫みなこの神の血を分てることを自覺して、同血の眷親十人も百人も唯一人と凝結し、家長を中心としてその手足のごとく働く現在家族の世にある。

みな祖先の賜なることを知り、益一家の榮達を計るは、自己の爲に止らず、祖先の名を辱しめざらんが爲、後世子孫の幸福の爲なりとす。かくして個人の活動はその死と共に消滅せずして、五尺の血肉の外に意義あり、輯睦せる家族は集りて社會を組織し、こゝに和氣藹々たる國家を見る。

聖徳太子の十七箇條憲法の第一條に「和を以て貴しとす」といへり。一家の親は延いて一國の和となり、君民上下合體して、確立せる理想に向うて進む。されど庭前の樹を見るも曲折あり、四季の變遷その順を違へずといへども、時に寒暖の期を失することなきにあらず。社會の秩序の紊るゝ時あり、民衆の歸趣の蔽はるゝ時ありて、國家は沈滞萎靡す。唯國民が全一體として最も強固に統合せられ、理想の燈最も明かにその前に輝く時、個人は國家の利益の爲に一死を惜しまず、現在を未來の犠牲として憚らず。國運こ

ここに於てか振興す。上古神功皇后が韓國と交渉し給ひしが如き、その好例なり。鎌倉幕府の創立は天皇と庶民との間に障壁を築きて國民歸嚮するところを失ひ天下漸く亂れ來りしが、豊太閤の出づるに及びて禍亂を戡定し、日光再び天に高く、久しく抑壓に艱みたる希望は勃然と頭を擡げて、更に朝鮮の役となりぬ。國民が一體として活動する時、國運の最も發揚すること、以て見るべし。されどこれには註脚を要すべし。「かくの如きは日本國民に限りての特色にあらずして、世界を通じて國家興廢の一般運命なり」と。然り、この言には異論なし。余が輩はわが國史を説くよりも、普通の歴史の規則を説くやうなるが、さりながら日本國民の團結力の殊に強固なるは、猶何人も許すところにあらずや。その人種的天性なるか、又は國土の形勢によりて養はれたるものなるかは知らず、とにかく古今を通じて萬國に比類なきところなり。世界のう

ち、一國興りて一國滅び、一朝絶えて一朝繼ぎ千年の舊國老いてなほ盛なるものなきに、ひとりわが國が上下三千載、抑揚波瀾を経て益、振ひ、更に青年の血氣を回復したるもの、これ果して何の爲ぞ。思はざるべからざるなり。

—國文學史講話—

五 幻住庵の記

松 尾 芭 蕉

松尾芭蕉
桃青と號す
伊賀の人
俳人
元禄七年歿(年
五十二)

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ。そのかみ國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登ること三曲、二百歩にして八幡宮たゞせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなる事を、兩部光をやはらげ利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いとど神さび、物靜かなる傍に、住み捨てし草の戸あり。蓬根、笹、軒を圍み、屋根漏り、壁落ちて、狐狸臥處を得たり。幻住庵といふ。

何某

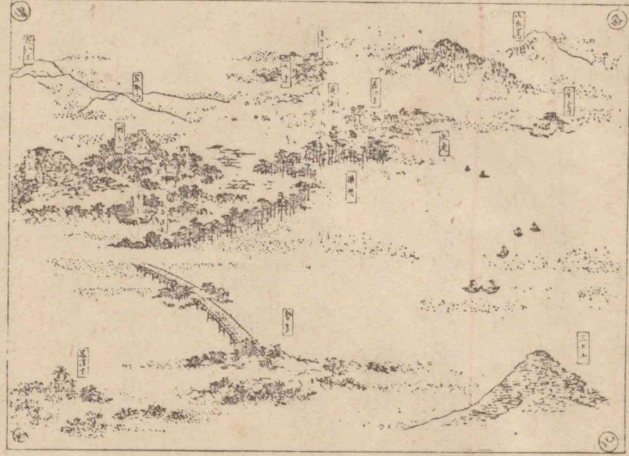
膳所藩士本多八左衛門

菅沼氏

曲水とも云ふ
近江膳所の藩士
本多氏に仕へた

やがて出でし

よしの山やがて
いでじとおもふ
身を花散りなほ
と人やまつらむ
(西行法師)



幻住庵の近古の圖

あるじの僧何某は、勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になむ侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ残せり。余また市中を去る事十年ばかりにして、五十年や、近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象瀉の暑き日に面を焦し、高すなご歩みくるしき北海の荒磯に踵を破りて、今歳湖水の波に漂ふ。にほの浮巢の流れとままるべき蘆の一本の蔭たのもしく、軒端葺きあらため垣根結ひそへなどして、卯月のはじめ、いとかりそめに入りし山の、やがて出でじとさへ思

ひそみぬ。

さすが春の名残も遠からず、躑躅さき残り、山藤松にかゝつて、時鳥しばし、過ぐるほど、宿かし鳥のたよりさへあるを、啄木鳥のつつくとも厭はじなど、そゞろに興じて、魂は吳楚東南にはしり、身は



幻住庵 (本一の昔)

瀟湘洞庭に立つ。山は、未申にそばだち、人家よきほどに隔たり、南薰峯よりおろし、北風海に浸して涼し。日枝の山、比良の高嶺より、唐崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂る、舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、籬の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水雞の叩く音、美景物として足らずといふ事なし。中にも三上山は、士峰のおもかげに通ひて、武藏野の古きすみかも思ひ出でら

三上山
近江國野洲郡
士峰

魂は
昔聞洞庭水
今上岳陽樓
吳楚東南折
乾坤日夜浮
瀟湘洞庭
惠宗烟雨歸雁
座我瀟湘洞
庭欲喚扁舟
歸去故人道是
丹青 (山谷集)

富士山の別名
田上山
無名抄に山麓に
猿丸大夫の墓ありと書いてある

海棠に
徐老海棠ノ巢
王翁主簿某ノ庵
(山谷集)

筑紫高良山
筑後國三井郡に
高良明神がある
今國幣神社
甲斐某
藤木甲斐守
寛永時代の人
能書家

れ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽千丈が峯袴腰といふ山あり。黒津の里はいと黒う茂りて、網代守るとと詠みけむ歌の姿なりけり。
なほ眺望くまなからむと、後の峯に這ひのほり、松の棚作り藁の圓座を敷きて、猿の腰掛と名づく。かの海棠に巢をいとなび、主簿峯に庵を結べる王翁徐佗が徒にはあらず。たゞ睡癖山民となつて、^{ヒカシ}辱顔に足をなげだし、空山に虱を捫つて坐す。たま／＼心まめなるときは、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とく／＼の雪をわびて、一爐のそなへいと輕し。はた昔住みけむ人の、殊に心高く住みなし侍りて、巧み置ける物ずきもなし。持佛一間を隔てて、夜の物をさむべきとこなど、いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、賀茂の甲斐何某が嚴子にて、このたび洛に上りいまそ、かりけるを、或人をして額を乞ふ。いとやす／＼と筆を染めて、幻住庵の

朝霧けし
あはれ水わたる
藤所う
網代守るとと詠みけむ歌の姿

三字を送らる。^{このあま}やがて草庵のかたみとなしぬ。すべて、山居といひ、旅寝といひ、さるうつは蓄ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。

晝はまれ／＼訪らふ人に心を動かし、あるは、宮守の翁里ののこども來りて、猪の稻くひあらし、兎の豆畑に通ふなど、わが聞きしらぬ農談。日既に山の端にかゝれば、夜座しづかに月を待ちては、影を伴ひ、燈を取りては、岡兩に是非をこらす。かく言へばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隠さむとにはあらず。やゝ病身に倦みて、世を厭ひし人に似たり。つらく／＼年月の移りこし拙き身の科を思ふに、一たびは仕官懸命の地を羨み、ある時は佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯のはかりごととさへなれば、終に無能無才にしてこの一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せ

樂天
白樂天
白居易のこと
支那唐代の詩人
老杜
杜甫のこと
支那唐代の詩人

たり。賢愚文質のひとしからざるもいづれか幻のすみかならず
やと思ひ捨てて臥しぬ。

先づたのむ椎の木もあり夏木立

—猿蓑集—

六 芭蕉の生活

藤村作

俳諧は室町時代からあつたものであるが、その時代の俳諧は滑稽遊戯の文學であつた。寂の文學としての俳諧は元祿時代の松尾芭蕉から始ると言つてよい。尤も寂の由來を求めれば、源泉は遠い。その遠い源泉から絶えぬ流が續いてゐるので、必ずしも芭蕉に始つたものではない。俳諧生活の特質としての寂を考へるには、芭蕉から澤山である。寂の特性を知るには芭蕉の俳諧の特質を調べなければならぬ。これを知るには芭蕉の生活を調べて見なければならぬと思ふ。

貞門
古風の俳諧を唱へた松永貞徳の一門を指していふ

一言にして評すれば、芭蕉は人格的な詩人である。初期貞門の俳諧を學んで居た時は、低級な遊戯的の俳諧であつたが、それから晩年の大成期に至る迄に、彼の藝術は數度變化してゐる。變化に富んだ彼の一生に、彼の人格は磨かれて次第に偉大をなしたものである。彼の生涯が人格の大成、生活の眞意義をもとめて怠らなかつた生涯である如く、彼の一代の藝術にも努力の跡を留めて、一步々高く大きくなつてゐる。學問や禪の修養といふものが、彼の人格と俳諧とを大成する助となつたことは固より疑もないが、彼の日常生活そのものは、亦それ以上に與つて力あるものであつた。彼の藝術には、常に彼の人格の光が射し、努力の痕が見えて居る。そこに普通の俳人の作品に較べて遙かに侵し難い權威がある。彼は晩年自分の生活を顧みて、無能無才にして此の一筋に繋がる」と言つてゐる。この一筋といふのは俳諧である。藝術で

ある。この意は、唯生活の方便として、已むを得ず俳諧に藝術に携はるといふ浅薄のものでないこと、彼自身の生活と藝術との間に、もつと密接の關係を保つことを言つたのである。一言にしていへば、心を俳諧にするといふことである。この二つは、彼にとつては偶然の關係では無く、寧ろ必然的な離さうとしても離されない深い關係に立つものと思はれる。彼にとつては俳諧を作ること、が彼の生活の方便でもあつたけれども、同時に彼自身の生活を作り上げて行くことであり、又彼の人格を大成して行く道であつた。彼の俳諧の特質の寂は、獨り彼の俳諧の特質でなく、彼の生活の特質であり、彼の人格の光であつた。

彼の傳記を案じ、彼の實際の生活を見ると、彼は現實のあらゆる慾望を捨て去つて、所謂隱遯の生活、行脚の生活に入つたのである。さうして、其處に心身の安易なる生活を見出さうとした。功名富

貴といふ様な現實の桎梏から離れて、纔に膝を容れるばかりの陋屋に住み、友人や門人達の惠む衣服、食物を以て満足しようとした。衣服も寒暑を凌ぐを程度として、たとひ柔い絹物は惠まれてもこ



(扶桑隱逸傳)

西行法師

れを謝絶して居る。食物も生命を繋ぐを以て満足しようとしてゐた。酒を飲んでも、無論肴に贅澤を言はない。かく慾望を退けて、現實の煩瑣を避け、自然の儘の簡易について、其處に静かな安らかな心持を味はうとして居たのが彼の生活である。閑寂にして物に役せられず、拘束されぬ生活を楽しみ、そこに人生の妙趣を見出さうとして居た。

彼が最も私淑した古人は西行法師である。西行に私淑して居た

俗名佐藤義清
鳥羽上皇に仕へ
後出家して諸國
を放浪した
建久元年寂

のは、獨り西行の歌を愛したのみでなく、西行の人格とその簡易な放浪生活とに深い共鳴を感じて居たものと思ふ。かく言へば、芭蕉の生活は全く隱遯的のものであり、退嬰的のものであり、消極的のものであり、従つて彼の寂といひ、閑寂といふのも、たゞ自分の肉體精神の安易を享樂するといふ、極めて安價な生活に過ぎなかつたやうに思はれる。彼の生活は果して一つの享樂生活であり、彼の俳諧も亦享樂的のものに過ぎないであらうか。深く考へて見れば、彼の生活は單に享樂的のもので無く、同時に彼の俳諧の寂も、多少充實したものと考へられる。

彼には更に進んで、自然の懷に走り、自然の生命を擲んで、それによつて人間生活の内容を向上させようとする態度があつた。芭蕉が自然に走つたのは、たゞ都門の生活の競争場裡に没頭した俗人が時々都門の煩雜を別莊に避けて、山水の間に閑適を貪らうと

する様な淺いものでは無い。彼は自然に對する深い憧れを持つて自然の底の底まで達して、其處に自然の生命を擲まうとしたものである。譬へば、古池や蛙飛込む水の音、閑かさや岩にしみ入る蟬の聲、或はよく見れば、齊花咲く垣根かな、明月や池をめぐりて夜もすがら、等、人口に膾炙した名吟を味へば、文字の上に表れた自然は、ありふれたものである。併し是等の句を通じて、芭蕉が自然の奥に潜んでゐる微妙の響に耳を澄して居る態度、じつと自然の神髓を見つめて居る態度、自然の中に自分を投げ込んでゐる態度を見なければならぬ。芭蕉の言葉に、

それ天地は風雅なり。萬象も亦風雅なり。

と云ふのがある。風雅は自然の美趣とも解せられよう。美趣は天地萬象の中に客觀的に存在するものではなく、自然に對する人の主觀の中に、又はその態度の中に見出されるものである。自然

を研究する科學者に對しては、自然は風雅ではない。自然の美を求め、自然の生命を探る人に取つて、始めて風雅といはれるであらう。芭蕉がその私淑した西行法師の像に、

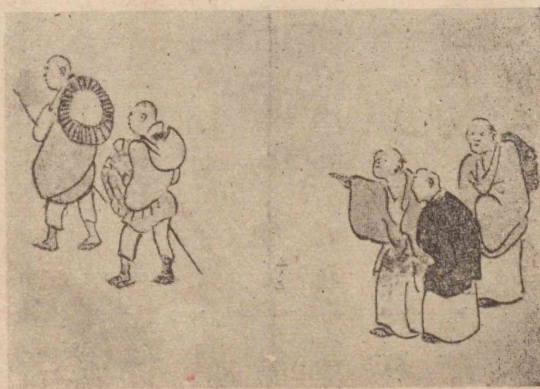
すて果てて身は無きものと思へども

雪の降る日は寒くこそあれ

花のふる日は浮かれこそすれ

と賛した。この添加された芭蕉の一句を得て、この言葉が西行の原歌以上に深い味ひを持つやうになつてゐる。

世を捨てて出家した身にも現實の苦しみはある。西行の歎きは其處にとゞまるが、芭蕉はそこに一步を進め、現實を離れようとす



(道細の奥頭籠)

姿旅の蕉芭

るものにも、自然の美、自然の生命に觸れては、自ら心の躍動することを禁じ得ない心持のあることを加へたものと思ふ。この浮かれる心は自然に陶醉した心持で、即ちそれが彼の所謂風雅の情であらうと思ふ。猶彼の文に、

風雅に於けるもの、造化に従ひ四時を友とす。見る所花にあらずといふことなし、思ふ所月にあらずと云ふことなし。形花にあらず、あらざる時は夷狄に等し。心月にあらずる時は鳥獸に類す。

夷狄を出て鳥獸を離れて、造化に従ひ造化に還れとなり。

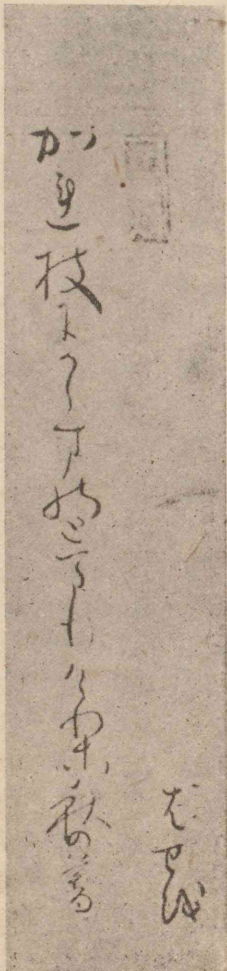
ともある。造化といふ言葉は、自然の生命或は自然の意志と見るべき言葉と解する。四時といふのは、その生命の形に表れた現象の自然である。四時に應じて變化するのが自然現象のならひであるから、これを四時と稱へたのであらう。故にこの引用句の意味は、自然をば自然の意志の儘に、その現象を見て友とせよ。自然

を征服し、利用するといふ考を離れて、自然のありのままに接し交はり、さうして自然の生命を捉へよ。さうすればあらゆる自然の現象は、悉く花ならぬはなく、月ならぬはなく、自然の美趣は我等の前にあらはれ、かくして自然の美を樂しみ得る所に、人間が夷狄禽獸と違ふ尊さがあるのである。それが即ち風雅である。その風雅を知らぬ者は、人間でなく、人生の眞の味ひを知るものではないといふことになる。此處までの意ならば、やはり彼は自然の享樂者に過ぎない様であるが、最後の句に「造化に従ひ、造化に還れ」と宣言してゐる。これは西洋の「自然に還れ」の叫びである。人間が昔から今日まで自ら作りあげた、あらゆる桎梏拘束を離れて、それ等の爲に變形せられた人生の姿から脱出して、人間本然の姿に立歸れといふことは、彼の生活に對する理想であつた。こゝに至れば、最早自然の享樂には止らないのである。人生の此の大理想を一

句の上に表したのが、かの

心柳にまかすべし

の句であらう。これは芭蕉の作ではないが、芭蕉の生活理想を詩的に表したものである。人生の悲しみなどの一切の心をあげて、これを大自然に任せて、「自然に歸れ」といふ叫びをこの一句に表は



芭蕉筆蹟

芭蕉

筆蹟
はせを
かれ枝にからす
のときりけり秋
の暮

したものであらう。人間の知識・學問を以て、無理に自然に抗すること無く、自然に合致した新しい生活を求めた彼の心を、この一句に表したのであらう。芭蕉が極端の貧乏に處し雲水の生活に身を任せて居たのは、外面的には無爲の生活の様であるが、内面的に

は複雑な積極的な意味があることは、右の句から考へ得られると思ふ。かく芭蕉は自然に復歸する事を求めたが、彼はこの大理想を成し遂げ得たかといふに、元より成し遂げ得なかつた。唯理想を求めて努力したその跡をば、彼の藝術に残してゐる。この大なる理想は、絶えず人間の大きな理想として残り傳はり行くべきものである。この理想を追求して、絶えず眞摯の態度を以て努力を續けた間の、彼の心の動搖が、彼の藝術であると思ふ。彼の俳諧が享樂的の自然を楽しんだ俳諧と撰を異にするのは、此處にあるのである。

然らば芭蕉は、自然の生命、造化をば、どういふ風に解釋したか。芭蕉は哲學者ではないから、何とも之に就いて説明を残して居ない。又之に對して宗教的の禮拜・祈願をしても居ないが、彼は常に自然に接し、これを唯現象として見てすますることが出来なかつた。

蕉風
芭蕉の起した俳諧の風
正風ともいふ

自然の現象を見つめる毎に現象の奥深く隠れてゐる生命を見出して、それに造化の名を命じたのである。そしてそれに絶えず憧れの心を捧げてゐた。そしてその生命は現象の奥深く隠れてゐて、俗人の容易に認めることを許さぬものであるから、之を幽玄といつてゐる。それと共に、又現象は千變萬化するけれども、その生命は萬古不易、寂然不動の姿をなすことを認めて、閑寂ともいつてゐる。即ち造化は幽玄にして閑寂なるものといふのが、芭蕉の自然觀の根本であらう。世間で「古池や蛙飛込む水の音」の句を、芭蕉の蕉風開眼の句といふは、恐らく附會の説であるが、この一句が芭蕉の俳諧の眞髓を得た句であり、芭蕉の會心の一句たることを是認する事は不當でないと思ふ。一日芭蕉は草庵に閑居して黙然沈思してゐた。すると、小庵の前の小さい池に蛙が飛び込んで、その水音が彼の鼓膜に響いたと想像してみる。しんとした天地の

静寂の中に、この水音の唯一つの響が起り、それが默想に耽つた芭蕉の心に觸れて、彼の主觀をかき起し、彼は常に憧れ常に求めてゐた閑寂幽玄の自然の眞の姿を、まぎ／＼と眼の前に見た。さうして自然の生命はこゝだとはかり、何等の技巧を加へずに、この心持を表現したのがこの句となつたと考へる。若しこの初五の「古池や」を、寶井其角が技巧的に「山吹や」と置き代へた通りにすれば、この句は全く變化してしまふ。又若し是に「閑かさや」といふが如き、心持を限定した句を加へ得るとしたならば、この一句は大いに深さを減じて、文字に表されたそれだけの句とならう。「古池や」といふ、何等の技巧を持たぬ有りの儘の心をおいてあるから全體の句は寧ろ暗示的になり、單刀直入に我等の主觀に迫つて來るのである。さうして何らかそこに深い或ものが句の中に潜んでゐることを思はせ、それが自然の祕密の謎である様に思はせる。寂靜中一つ

寶井其角
本姓榎本氏
江戸の人
俳人
寶永四年歿

の響が、天地の祕密を解く鑰となつて我等の心に或默會が起つて、成程自然は幽玄閑寂であるといふことに、否み難い同感を持たせるものであると思ふ。

かく見て來れば、芭蕉は現實に對しては消極的退嬰的なることを免れぬが、自然には積極的で、進んで自然の眞相を開き、自然の奥まで行つて、その生命を掴まうとした人である。現實に對しては、芭蕉は溫情は持つてゐたが、熱意は持つて居なかつた。自然に對しては、實に燃ゆるが如き熱意がある。一切の慾望を棄てて自然の懷に赴いたのは、この熱意に由つたものと思ふ。さうして自然と人生とを結合することによつて、其處に新な人生の理想を見出して「自然に還れ」の叫び聲を揚げてゐるのであらう。さうして見れば、自然と人生に對するかくの如き態度から産れた彼の生活は、徒に無爲なる生活とは言へない、内容の無い空疎の生活とは言へ

芭蕉の生活

ない、倦怠した生活とは言へないのである。少くとも、其處に充實性と緊張味とを失はなかつた生活であると思ふ。よし現實に退嬰的、消極的であつたとしても、現實にとらはれてゐないから、彼の心境は他の因襲に拘束された俗衆と違ひ、大いに自由であつたといはねばならぬ。この自由の心をもつて芭蕉は一途に自然に向つて走り、その生命を擱まうとしたのである。芭蕉の眼前には、自然は單に自然として現れず、造化として現れた。春夏秋冬に變化して、しかも刹那も止まらないで、永遠に渉る不易のものとして現れた。かうして芭蕉の生活は、外面的には消極的に無爲に見えても、内面的には可なり積極的の意味を持つてゐたと思ふ。彼の藝術が現實に對する教訓も知識も與へぬのは、芭蕉の生活が現實に退嬰的、消極的であつた爲であらう。彼の藝術が自然に對する無限の感銘を我等に與へ、更に永遠の人生に對して大なる暗示と慰

藉とを與へるのは、これが爲であると考へる。—上方文學と江戸文學—

七 松の手入

里 見 亭

里見亭
本名は山内英夫
東京市の人
文學者

母屋の留守番にはいつてゐる植木屋さんが、庭の手入を始めた。齒痒がる性分の私は、黙つて見てばかりはゐられなくなつて煙草休をしてゐる側で、鎌などを使つて見た。霜がかゝつて芝が硬くなつてゐるせゐださうだが、あぶなくて、とても素人には刈れないことを知つた。鋏はなほさら、馬鹿と鋏は使ひやうと云ふ位で、力ばかりいるので、全くこの仕事は駄目であつた。うまくやれさうなら、自分も一挺買つて來て、手傳はせて貰はうと思つてゐた望も全く捨てるより外仕方がなかつた。

そのうちに、ある日、松の手入にかゝつたのを見て、これなら出來ると思つた。どういふ風にやるのか、よくも見習はずに、至極簡單

に考へて、すぐ私は手ごろな小松の前に立つた。それでも一寸見
覺えて來た通りに、まづ小枝を元の方から先の方へとしごいて見
た。しごくに従つて、ばら／＼とたやすく落ちる葉があつて、それ
から先の方のばつと開いたのに至ると、しつかりついてゐる。は
は、こりや植木屋に習はずとも、松自身が、いらぬ葉を教へてゐ
るなと思ふと、急にこの仕事が素敵に面白くなつて來た。植木屋
といへども、決して無理な人工を加へて能事終れりとするわけ
はない、天然に手を貸すことを以て大專とするのだなどと考へて
ゐるうちに、中學時代に學校で讀ませられた漢文の讀本に、たしか
「郭橐駝傳」といふ題で、植木職の第一義は樹木を愛する念だ、枝を撓
めたり樹皮に爪をたてたりするのは、抑、末技であるといふやうな
議論をして、素人の謬見を正してゐる文章があつたことを思ひ出
した。私は益、愉快になつた。なんとなく私は、植木屋などといふ

郭橐駝傳
唐の柳宗元の作

ものは、樹木にとつてはありがた迷惑なものではないかと云ふ風
な氣持がないでもなかつたのであつたが、實際自分でやつて見て、
松の方ではつきりと、いる葉といらぬ葉とを教へてくれるのに
すつかり安心し、また感服もしたのであつた。植木屋に慥めたわ
けではないから、必ず間違がないとは斷言は出來ないが、小枝のも
との方に残つてゐるのは、恐らく去年あたり生じた葉で、その當時
には、そこが先端で、つまりぼつと葉が勢よく開いてゐたところな
のであつたらうが、今では枝が伸びてしまつて、それはあつてもな
くても差支ないものになつて、肝腎な點はその先に移つてしまつ
たのたといふやうな關係であるに違ない。

そこで、松に教へられる通りに、そのいらぬ葉を除いて見ると
枝ぶりのはつきりして、新芽の葉が形よく現れて來る。これまで、
商賣とは云ひながら、よくあゝいふ風に形を綺麗につけるものだ

と思つてゐた仕事であつたが、實際やつて見ると、松の言葉に柔順である限り、悪い形にはしようとしても出来ないのであつた。何も別に善くしようとしなくても、そのよい形を埋めて被うてゐる餘計な葉を取り去るだけで、見違へるばかりに松の容姿が調つて來るのだ。

私は枝を整へながら、ふいと口の中に、巧笑倩兮、美目盼兮といふ言葉が浮かんで來たが、つまり眞黒に垢づき汚れ、蓬々と髪などが亂れてゐても、その天然の素質に従つて、之を湯に入れてやつたり、髪を整へてやつたりすると、ちつとも變らないのだ。こゝが口で、こゝが目だ。こゝまでが枝で、こゝからが葉柄だ。即ち同じこととて、枝葉倩たり、盼たりになる。とりもなほさず、美しい樹木の一つの要件はその素質にある。その素質をそこなはずに伸ばしてやるのが植木屋の仕事だ。

巧笑倩兮
詩經の語

尤も、これは庭木としての松だけに就いて云つたことで、處女林の杉がどうの、山毛櫸がかうのと云ひだされては困る。それは野蠻人にでも、獸にでもその儘で美しさはある。こゝにはたゞ人が天然に手を貸して、より美しいものにする事が出來ると云ふ意味で、松の手入の話をしただけである。

指が樹脂のために眞黒に、そしてにちやく／＼になり、手は肘近くまで針葉にさゝれて、赤い斑點が出來ることさへ厭はないならば、これは慥に誰にでも面白い仕事だ。その面白さは、私のこの文章を讀んだだけでは分るまいけれど、やつて見れば松がよく教へてくれる。

無聲のものに語るといふところに、靜かな、さうして心持のよい味があるのだ。

—白醉亭漫記—

八 寂光院大原御草

平家物語

法皇
後白河天皇
文治二年
皇紀一八四六年
後鳥羽天皇の御
代

建禮門院

平清盛の女徳子
高倉天皇の皇后
で安徳天皇の御
母君

大原

山城國愛宕郡の
村

北祭

賀茂の祭四月中
の酉の日に
行は
れる

徳大寺

藤原實定

花山院

藤原兼雅

土御門

源道親



建禮門院御木像

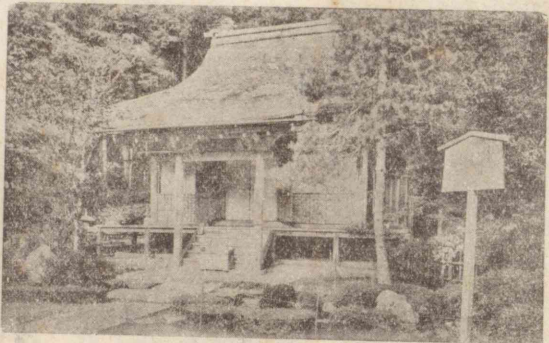
法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御すまひ御覽ぜまほしうは思し召されけれども、衣更着彌生のほどは嵐烈しう餘寒もいまだ盡きせず。嶺の白雪消えやらで、谷のつら、もうち解けず。かくて春過ぎ、夏來つて北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には徳大寺、花山院、土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。遠山に懸る白雲は散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまる。頃は卯月二十日餘りの事なれば

寂光院

山城國愛宕郡大
原村

青葉まじり

高山の青葉まじ
りの遅櫻初花よ
りもめづらしき
かな 金葉集
(藤原盛房)



寂光院

夏草の茂みが末を分け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたるほど思し召し知られて、あはれなり。西の山の麓に一字の御堂あり。即ち寂光院これなり。古う造りなせる泉水木立、由ある様の所なり。葦破れては霧不斷の香を焼き、扉落ちては月常住の燈を掲ぐとは、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂り合ひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より、山杜鵑の一聲も、君の御幸を待顔なり。法皇これを御覽あつて、かくぞ

あそばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて、

なみの花こそさかりなりけれ

ふりにける岩の絶間より落ちくる水の音さへ古びて、よしあるなり。緑羅の垣翠黛の山繪にかくとも筆も及び難し。

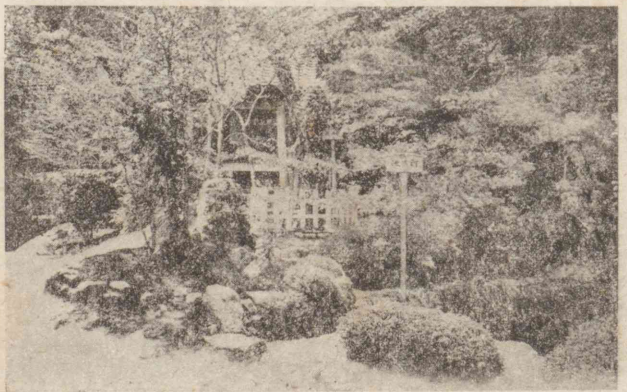
さて女院の御庵室を觀覽あるに、軒には蔦薜はひかりし、まじりの忘草、瓢箪屢空し、草顔淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕すともいひつべし。杉のふき目もまばらにて時雨も霜もおく露も洩る月影にあらそひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山前は野邊いざさを笹に風さわぎ、世にたぬ身のならひとて、うきふししげき竹柱、都の方の音づれは間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとは、峰に木傳ふ猿の聲賤がつま木の斧の音、これ等が音づれならでは、まさ木のかづら青つゝらくる人

瓢箪屢空し
瓢箪屢空し
滋顔淵之巷
藜藿深く雨
濕原憲之樞
和漢朗詠集
(橋直幹)

稀なる所なり。

法皇人やある、人やある。と召されけれども、御應へ申す者もなし。

や、あつて老い衰へたる尼一人参りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ」と仰せければ、「この上の山へ花摘みに入らせ給ひ候」と申す。「さこそ世を厭ふ御習とはいひながら、さやうのことに仕へ奉る人もなきにや、御痛はしうこそ。」と仰せければ、「この尼申しけるは、五戒十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽せられ候ふにこそ。捨身の行になじかは御身を惜しませ給ひ候ふべき」とぞ申しける。この尼の有様を御覽



池の汀院光寂

ずれば、身には絹布の分ちも見えぬ物を結ひ集めてぞ着たりける。あの有様にても、かやうのこと申す不思議さよと思し召して、抑、汝はいかなるものぞと仰せければ、この尼さめくくと泣いてしばしは御返事にも及ばず。

稍あつて涙をおさへて、申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女阿波の内侍と申すものにて候ふなり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。とて、袖を顔に押當てて忍びあへぬ様目も當てられず。法皇げにも汝は阿波の内侍にこそあなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、たゞ夢とのみこそ思し召せ。とて、御涙せきあへさせ給はず。供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ各、感じあはれける。

信西

藤原通憲

鳥羽、崇徳、近衛、

後白河四天皇の

朝に歴仕し、平

治の亂に殺され

た

紀伊二位

信西の妻朝子

紀伊守範元の女

普賢

普賢菩薩

善導和尚

唐の高僧

八軸の妙文

法經華のこと

九帖の御書

善導和尚の觀無

量壽經の疏を云

浄名居士

維摩詰

釋迦と同時代の

人

定基法師

入唐し、圓通大

師といつた

清涼山

唐の清涼山の竹

林寺

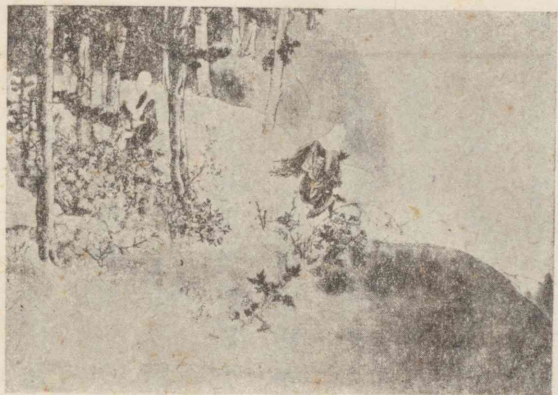
さてかなたこなたを觀覽あるに、庭の千草露繁く、籬に倒れ掛りつゝ、外面の小田も水越えて、鳴立つ隙も見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引明けて、觀覽あるに、一間には來迎の三尊おはします、中尊の御手には五色の絲を掛けられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚並びに先帝の御影掛け、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の薰に引換へて、香の烟ぞ立昇る。かの浄名居士の方丈の室の内、三、萬二千の床を並べ、十方の諸佛を請じ給ひけんも、かくやとぞ覺えける。障子には諸經の要文、ども色紙に書いて、所々におされたり。その中に大江の定基法師が、清涼山にして詠じたりけん、笙歌遙に聞ゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前とも書かれたり。少し引きのけて、女院の御歌と思しくて、思ひきや深山の奥にすまひして

くもるの月をよそに見んとは

さて傍を叡覽あるに御寢所と思しくて竹の御竿に麻の御衣紙の御衾など掛けられたり。さしも本朝漢土の妙なる類數をつく

大原御幸

し綾羅錦繡の装もさながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の人々もまのあたり見奉りしことども今のやうに覺えて皆袖をぞ絞られける。



下村觀山筆

稍あつて上の山より濃き墨染の衣着たる尼二人岩のかけちを傳ひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇あれはいかなるものぞと仰せければ、老尼涙をおさへて花筐臂にかけ岩躑躅取具して持たせ給ひて候ふは女院にてこそわたらせ給ひさふらふなれ。つま木に葺折添へ

て持ちたるは鳥飼の中納言維實の女五條の大納言國綱の養子先帝の御乳母大納言の典侍の局とまうしもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させたまへば供奉の公卿殿上人も皆袖をぞ濡されける。女院は世を厭ふ御習といひながら今かゝるありさまを見えまゐらせんずらん耻づかしさよ。消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき。宵々毎の闕伽の水掬ふ袂もしをるゝに、曉おきの袖の上山路の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へもかへらせ給はずまた御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたるところに、内侍の尼参りつゝ、花筐をば賜はりけり。「世を厭ふ御ならひ何か苦しう候ふべき。早々御見参あつて、還御なし参らせ候へ」と申しければ、女院御涙をおさへて、御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かなとて、御見



高山樗牛

名は林次郎
山形縣の人

文學博士

明治三十五年歿

(年三十二)

木曾の五萬騎

木曾義仲の軍勢

みよし野の山

三吉野の山のあ

なたに宿もがな

世のうき時のか

くれがにせむ

(古今集)

六波羅・池殿・西

八條

みな清盛の館

參ありけり。

平家兼朝の御代 武人か文人と云りたる哉

九 平家雜感

高山樗牛

凡そ世に傳へ遺されし歴史は多かれど、平家の都落ばかり、哀れにもまた目覺ましきはなかるべし。

南都の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬨なほ響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち満ちぬ。宇治淀の備脆くも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。あはれ、一門天下に身を置くに所なし。世はかく憂きを、み吉野の山のあなたに隱家はなきか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の行幸に一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死も知らぬ別路に人の哀れの限りもなう、また歸り來べき都としも思はねばにや、六波羅・池殿・西八條以下一門譜第の邸宅・宿房・京白川の四五萬家をあはせて、一炬の煙となしはてぬるこそ、あわただしかりしか。

保元

保元の亂

故郷を

故郷を焼野が原

とかへり見て末

も煙の波路をば

行く 平家物語

(平經盛)

ここに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜々悲しむ。保元この方天下の榮華を盡したる花の都の故郷を、焼野の原と顧みて、末は煙の波路をば行方も知らずさすらふらん。直衣束帶の身にも、今は黒金の衣を着けたれども、誰かは詠歎の餘哀になれて、弓矢の響を勵むべき。さても棄て難き命や。今こそはうき世なれ。さすがにしのぼるる昔のさまの夢に入るをばいかにせん。翠華搖々として西に向へば、秋風到る所の野に満てり。嗚呼、きのふは東關のもとに轡を並べて、十萬餘騎けふは西海の波に纜を解きて、七千餘人。行手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づる山の端を、あなた空とや思しけん、日暮、舳に笛吹く人あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳を敬つ。嗚呼、この時この

人想果して如何。

世にも哀れなるは平家とぞいふめる。げにこの一門の盛衰を考ふるに心も詞も及び難きなり。

案ずれば、一旦の榮華に耽りて、百年の計を思はず、今や秋の嵐の吹き荒ばんずる旦も、春の夜の夢なほ臚にして、覺めての後はさすがにうき世と觀ずれども、先世後代すてに梭をかへたるをいかにすべき。今を昔に反さんすべもかた絲のよりくづれたる世こそ返す返すも是非なけれ。

されば風雅にかくれては、一題の遺詠に今生の本懐を終へ、恩愛にほだされては、三身の現在に來世の果報を思はず。哀は桐



平家の都落

遺詠

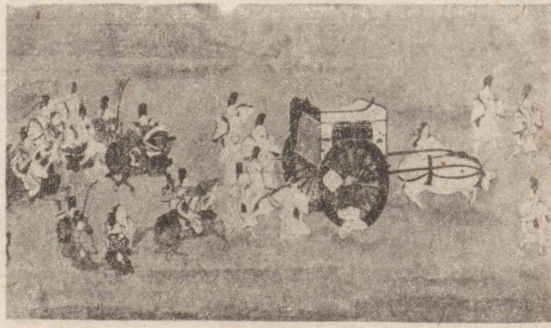
不忠度をさす
さざ波や志賀の
都は荒れにしを
昔ながらの山櫻
かな 千載集
(讀人不_レ知)

恩愛

平維盛のこと

の一葉に散り初めて世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば怪しきまでに哀れなりける運命かな。

さるにても、入道相國の人物とその生涯とは、そも如何なりしか。弓矢のいさをしはや畢んぬ。朝家の權柄今はた盛んなり。一門殿上に昇りて六十餘人、私封全國にわたりて三十餘州、攝籙の家は名のみにて四海の成敗者皆ここに集まれり。昔は殿上



(春日權現靈驗記繪詞)

入道相國

平清盛

昔は殿上の交
平忠盛が殿上人
より爪はぢきさ
れた昔のことを
さす

十善
不殺生・不偷盜
不邪淫・不妄語
不惡口・不兩舌

の交をだに嫌はれし人、今は「この人ならでは人にあらじ」と唱へられ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏これが爲に目を敬つるばかりなり。されば十善の帝王畏くも外戚の威におされ給ひて、八幡・賀茂の御幸は、八重の潮路の巖島とぞ觸れられける。な

不綺語・不貪慾
不瞋恚・不邪見
書かれしも
平家物語を指す

帝座俄に動きて
治承四年福原に
遷部(平家物語)

維盛
清盛の嫡孫
重盛の長子

木曾の山氣

にがしの卿が入る日をも招きかへさんずる勢と書かれしも、げに
ことわりとぞ覺ゆる。
不敵なる入道は、私門の榮に飽きたらで、世に人もなげにふるま
はれけるこそゆゆしけれ。ここに卿相雲客、流離の難に遇ふもの
四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射山の嵐をしのば
せ給ふ。中にも重代の帝座俄に動きて、愛宕の里の哀れをとどめ
けるこそ、なかなかにあさましかりしか。

咲きも残らず散りも始めぬ、櫻花嵐なくともかくてやはやむべ
き。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に
萌黃匂の鎧着て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀、帶佩
こそ、あつばれ平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の水禽に算
を亂しし十萬餘騎は、徒に永き世の笑をとどめたるに過ぎず。加
ふるに北土俄に雲亂れて、木曾の山氣漸く都に逼り、兩山の衆徒ま

木曾義仲の擧兵
のこと

兩山

比叡山延曆寺と
奈良興福寺

たすでに反覆の色を示しぬ。平家の運命日に益、急なり。

時しも入道は病に罹りぬ。あはれ病の床の寂しきに霜夜の鐘
の響も闇の底に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至るまで、
三十餘年の過去を靜かに憶ひ出でたる時、而して命の際の身ぞと
觀じたる時、彼果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身に
餘りて保元のいさをまたいふに足らずと思はざりしか。己につ
らかりし人々を、かくまでに惱まししことの罪深かりきとは思は
ざりしか。幾たびか帝座を驚かし奉りしは、ては、軍兵を擁して法
皇を幽閉しまるらせしことの中にも、非道の所行なりしを思はざ
りしか。更に小松の内府が、身命にかへて乃父の罪業を救はんと
せし至孝の情に思ひ到りて、恩愛の絆にうたた悔恨の心を動かす
ことなかりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六
慾煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を棄てて、未來の

小松の内府
平重盛

淨榮を欣求する一念を發することなかりしか。皆あらず。入道は死に至るまでその初念を翻すことなく、正に生けるが如くにして死せしなり。

今はの詞にいはいはく、兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこそ返す返すも遺憾なれ。我死したりとて佛事孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず、急ぎ討手を下し、彼が首を刎ねて我が墓前に懸けよ。これぞ我に對しての今生後世の孝養にてはあらんずと。一念の執着に必衰の運命をもともせず、三世の因果を身にひくともなほ怨敵に報いんことを必せり。その事の可否はしばらく措き、とまれ丈夫たる心の強さは感すべきなり。たとひ四海の波を翻して彼が頭にそそぐとも、なほこの一我をいかにともすること能はざらん。六尺の砂軀ここに至れば天地の大にも比ぶべく、運命我に於て浮塵に等しからん。所謂死して而して生けるものとい

ふべきか。

一 樗牛全集

中勘助
文藝家

一〇 わが家の庭

中 勘 助

庭には雑草が生えはうだいに生えた。これは私が草をとることを怠つたからではない。かへつて私はとき／＼腰をかゞめて殊勝に草とりをするのだが、たゞ世間の人のやうに庭木と雑草を峻別して、その雑草を一切庭においてはならぬものときめて、残らず斥けてしまはうとしないからである。またそんなことをすれば私の庭は格別風情があるでもない、幾本の自然の小松のほかには、なにもないたゞの砂地になつてしまふであらう。もと／＼植物の種類がすくない海岸の砂地なので、その貴重な雑草のなかから私のすかないものだけをぬきとつたあとには、あらまし莎草科

のふたいろが大體の基調をつくることになつた。そのつやゝかな葉は日に照らされては光り、雨にぬれては色を深くし、夜はきらきらと露の玉をおく。そのなかにひとむらの螢草がはえた。これは花につれてのいろ／＼の思ひ出の中で最も古いひとつをもつてゐる花である。うぶですなほなこの草は私を育ててくれた伯母さんの背なかにおぶはれてゐたときからの仲よしであつた。さうして今でも私は毎朝膳にむかふまへにまづ縁側へ出てそのつめたい藍色をめるのである。夏の夜の暑くるしい暗黒から、けだるい休養からさめて生き／＼として瞳に最初の影をうつすにはまことにふさはしいものである。食事をすましたのちも私はよくそのまゝ、食卓に頬杖をついてしみ／＼と眺めてゐる。と、私の胸にやがては詩歌の酒となるべき芳しい醱酵がはじまる。とはいへそれはいつとはなしに蒸發して、影もとめなくなつてし

まふ。夏の過剰な光と熱が私の肉體の酒槽に禍するのである。さうして可憐な花もまた私のまだるい歌を待ちあぐねて、終には姿をかくす。そのとき私はなにがなしかすかな寂しさと悔恨に似たものを感じる。

日が高くなると松林のむかふの路を大きな山東牛が車をひいてとほる。彼は十町ばかりはなれた川のへんから、この近所のある普請場へ土を運ぶのもう百回にもなると人がいつてゐた。雨の降らないかぎり私は毎日のやうにそれを眺めてゐるのだが、たゞの一度も彼の全身を見たことがない。それは松の幹にくぎられ、枝にかくされていつもちぎれちぎれに見える。そしてその部分々々が牛歩の進むにつれて徐々に不斷にかはつてゆく。さすがに彼は禮節の國から來たゞけあつて、その重々しい足どりと首のふりかたに悠揚迫らざる節調をもたせ、子孫末代までも先王

の禮に従はうとするかのやうに優雅に嚴肅にふるまひながら、大陸の土の色をしのぼせる褐色の身體を、赫々たる天日にさらして、天なり命なりと車をひいてゆく。彼はたぶんトウモロコシ陬邑トウモロコシの生まれであらう。

夕食後ひと休みしてから植木に水をやる。そこいらからとつてきたものは自然おほかた地味にあつてゐるので、かなりなげやりにしておいたにもかゝらずほとんど残らずついた。ぐみいぼた、野萩、ねむつるもどき。草は、なでしこ、われもかう、鳴子百合など。夕顔、小瓢箪、これらは蒔いたものである。宿のはづれの植木屋へなにかの種子を買ひにいつたら、かみさんが出てきてそれはないが小瓢箪ならあるがどうだといった。小瓢箪！私はひよいとその名に惚れて、したてるせきもないのを承知で買つてきたのである。

なほ氣がむけば菜園にも水をかける。白菜、いんげん、二十日大根。ふぎ豆に茄子にいちご。胡瓜にしやうが、まだあらう。品數からみると一町歩もありさうだが、實は三本五本づつあちこちのわづかな餘地に窮屈につくつたものである。とはいへたつた二人きりの家内では、これらの貧しい收穫すら始末しきれないので、とき／＼小策に一杯ぐらゐづつ近所の誰彼へわける。乏しいながらにありあまる收穫、これこそ最も大きな天福である。

労働のち私は湯殿で水をつかつて汗を落し、縁に出て暑氣と疲労に溶けさうな五體を風にあてながら、草の葉におく露をながめ、松の枝に鳴きかはす雨蛙の聲にきゝとれて、微醺ヒククを帯びたとき、のやうに、さまざまの思が輕快に腦裡を過ぎてゆくのを楽しんでゐる。

しづかな流

も教目録

名は金之助
東京の人
文學者
大正五年歿(年
十三)

一一 子規におくる書

草枕
夏目漱石

一丈餘の長文被下有難く拜見小子俳道發心につき色々の御教訓何よりも嬉しく熟讀仕候。天稟庸愚のそれがし物になるやらならぬやら覺束なき儀には存候へども性來かかる道は下手の横好とやらに候へば向後驥尾に附して精々勉強可仕候間何卒御鞭撻被下度候。

玉作數首謹んで拜見俳句はいづれも美事に御座候。仰せの如く句調の具合先日中拜見仕候ものと、夙かに別機軸の御手際と感心仕候。峽中雜誌第一、五首中の翹楚と存候。管々しき細評は佛頭の天糞とやらにつき御免蒙り候。實は負けぬ氣に次韻でもして君の一祭を博せんと存居候處、去月下旬一族中に不慮の不幸を生じ、それが爲彼是取紛れ、只今にては硯に對する閑暇はあれど筆

を執る忍耐力なく、幼學詩韻をひねくり廻す騒ぎにも參り兼ね候間、次韻の儀も願下に致候。

不幸と申し候は餘の儀にあらず、小生嫂の死亡に御座候。實は去る四月中頃より風邪の氣味にて、床につき、その後兎角打勝れず漸次重症に陥り、遂に浮世の夢廿五年を見残して、冥土へまかり越し申候。天壽は天命、死生は定業とは申しながら、洵に洵に口惜しき事致候。

わが一族を稱揚するは何となく大人氣なき儀には候へども、彼女程の人物は男にも中々得易からず、況して婦人中には恐らく有之まじくと存居候。そは夫に對する妻として完全無缺と申す儀には無之候へども、社會の一分子たる人間としては、まことに敬服すべき婦人に候ひし。先づ節操の毅然たるは申すに不及、性情の公平正直なる、胸懷の洒々落落々として、細事に頓着せざる、杯生れな

魂歸冥漢
(三體詩)

がらにして悟道の老僧の如き見識を有したるかと怪まれ候位、鬚髻々たる生悟りのえせ居士はととも及ばぬ事、小生自ら慚愧仕候事幾回なるを知らずか、る聖人も長生きは勝手に出来ぬ者と見えて遂に魂歸冥漢、魄歸泉



只住人間廿五年と申す場合に相成候。さはれ平生佛を念じ不申候へば極樂にまかり越す事も叶ふまじく、耶蘇の子弟にも無之候へば天堂に再生せん事も覺束なく、一片の精魂もし宇宙に存するものならば二世と契りし夫の傍か平生親しみ暮しし義弟の影に髣髴たらんかと、夢中に幻影を描きこゝかしこかと浮世の羈絆に

つながるゝ死靈を憐みうたゝ不便の涙にむせび候。母を失ひ伯仲二兄を失ひし身のかゝる事には馴れ易き道理なるに、一段毎に一層の悼惜を加へ候は、小子感情の發達未だその頂點に達せざる故にや。心事御推察被下度候。

鷗外
名は林太郎
島根縣の人
醫學博士
文學博士
大正十一年歿

鷗外の作ほめ候とて、圖らずも大兄の怒を惹き、申譯も無之、是も小子嗜好の下等なる故と、只管慚愧致居候。元來同人の作は僅か二短篇を見たる迄にて、全體を窺ふ事かたく候へども、當世の文人中にては先づ一角ある者と存居候ひき。試みに彼が作を評し候はんに、結構を泰西に得、思想をその學問に得、行文は漢文に胚胎して和俗を混淆したる者と存候。右等の諸分子相聚つて、小子の目には一種沈鬱奇雅の特色ある様に思はれ候。尤も人の嗜好はその人の受けたる教育にて、種々なるものなれば、己は公平の批評と存候ても、他人には極めて偏屈なる議論に見ゆる事もあるものに

候へば小生自身は洋書に心酔致候心持はなくとも、大兄より見れば左様に見ゆるも御尤のことに御座候。全體あの時君と僕の嗜好は是程違ふやと驚き候位。併し退いて考ふれば、これ前にも言へる如く、元來の嗜好は同じきも、學問の行き掛りにてかゝることに立ち到り候事と存じ、それよりは可成博覽をつとめ偏僻に陥らざらん様に心掛居候。その上日本人が自國の文學の價値を知らぬと申すも日本好きの君に面目なきのみならず、日本にそれ程よき者のあるを打ち棄てて、わざ／＼洋書にうつゝをぬかし候事、馬鹿馬鹿しき限りに候のみならず、我等が洋文學の隊長とならん事、思ひも寄らぬ事と、先頃中より己と己の貫目が分り候へば、以後は可成大兄の御勧めにまかせ、邦文學研究可仕候。さはれ成童の頃は、天下の一人と自ら思ひ上り、三身の己を欺いて今迄知らずに打ち過ぎけるよと思へば、自ら面目なき迄に愧入候。性來多情の某

司馬江漢

名は峻

江漢は號

春波樓・不言道

人とも稱す

はじめ浮世繪、

後に洋畫を畫く

文政元年歿

春波樓筆記

司馬江漢の所感

集 一卷

橘曙覽

井手氏ともいふ

福井の人

江戸末期の歌人

明治元年歿(年

五十七)

源俊賴

平安朝末期の歌

人

權大納言源經信

の子

何にでも手を出しながら、何事もやり遂げぬ段無念とは存候へども、是亦一つは時勢の然らしむる所と諦め居候。御憫笑被下度候。頃日來、司馬江漢の春波樓筆記を讀み候が書中往々小生の言はんと欲する事を發揮し意見の暗合する事、間々有之、圖らず古人に友を得たる心にて愉快に御座候。これは序ながら申上候。

時下炎暑の砌御尊體精々御いとひ可被成候。

拜具

八月三日

金之助

子規様

一一 橘曙覽の歌

正岡子規

余の初め歌を論ずるや、或人余に勧めて俊賴集文雄集、曙覽集を見よといふ。そのかくいふは三家の集が尋常歌集に異なるところあるを以てなり。余先づ源俊賴の散木弄歌集に失望す。いく

井上文雄
江戸末期の歌人
明治四年歿

松平春嶽

らかの珍しき語を用ひたる外に何の珍しき事もあらねばなり。次に井上文雄の調鶴集を見てまた失望す。これも物語などありて、普通の歌に用ひざる語を用ひたる外に、何の珍しき事もあらねばなり。最後に橘曙覽の志濃夫廼舎歌集を見て、始めてその尋常の歌集にあらざるを知る。その歌古今新古今の陳套に墮ちず、眞淵景樹の窠臼に陥らず、萬葉を學んで萬葉を脱し、瑣事俗事を捕へ來りて縦横に馳驅するところ、却つて高雅蒼老、些の俗氣を帯びず。殊にその題目が風月の虚飾を貴ばずして直ちに自己の胸臆を擴くところ、以て識見高邁、凡俗に超越するところあるを見るに足る。而して世人は俊頼と文雄とを知りて曙覽の名をだに知らざるなり。曙覽の事蹟、及び性行に關しては余未だ是を聞くを得ず。歌集にある所を以てこれを推すに、福井邊の人にして、廣く古學を修め、夙に勤王の志を抱けるが如し。松平春嶽擧げて和歌の

名は慶永
福井藩主
明治二十三年歿

師とし推奨最もつとむ。然れども赤貧洗ふが如く、常に陋屋の中に安んじて世と容れず、古書堆裏獨り破几に凭りて古を稽へ道を樂しめり。詠歌の如きは固よりその專攻せしところに非ざりしなるべく、胸中の不平は他に漏らすの方無く、凝りて三十一文字と



橘 曙 覽

爲りて現はれしものならん。その歌が塵氣を脱して世に媚びざるは蓋しこれがためなり。彼自ら稱していはく、

吾が歌をよろこび涙こぼすらむ

鬼のなく聲する夜の窓

燈火のもとに夜なく、來たれ鬼

我がひめ歌の限りきかせむ

人臭き人に聞かする歌ならず

鬼の夜ふけて來ばつげもせむ

凡人の耳にはいらじ天地の

こゝろを妙に洩らすわがうた

何等の不平ぞ何等の氣焰ぞ。彼はこの歌に題して「戯れに」といひたれども、「戯れ」にあらざるは、これを讀む者誰か知らざらん。然るを猶強ひて「戯れに」と題せざるべからざるもの、その裏面には實に萬斛の涕淚を湛へたるを見るべきなり。嗚呼これ不遇の人、不遇の歌。彼と春嶽との關係と、彼が生活とは、春嶽自記の文に詳かなり。曙覽が清貧に處して獨り安んずるの様及び春嶽が富貴の身を以て能く士に下るの様け、その文を見て能く知るを得ん。この知己あり、曙覽地下に瞑すべきなり。曙覽が清貧の境涯は略この文に見えたれども、彼が衣食住の有様その生活の程度如何は、その歌に因つて一層詳かに知ることを得べし。

人に傘かしたりけるに、久しう返さざりければ

童して取りにやりけるに、もたせやりたる

山吹のみの一つだになき宿は

かさも二つはもたぬなりけり

その貧しさ想ひやるべし。

彼に「獨樂吟」と題せる歌五十餘首あり、歌としては秀逸ならねど、彼の性質、生活、嗜好などを知るには最も便なり。その中に、

たのしみはあき米櫃に米いでき

今一月はよしといふ時

たのしみはまれに魚烹て兒等皆が

うまし〜といひて食ふ時

など、貧苦の様を詠みたるもあり。余は思ふ、曙覽の貧は一般文人の貧よりも更に貧にして、而して貧曙覽が安心の度は、一般文人の

安心より更に堅固なりきと。蓋し彼に不平無きに非ざれども、その不平は國體の上に於ける大不平にして、衣食住に關する小不平に非ず。同じ「獨樂吟」の中に、

たのしみは木芽にやして大きなる

饅頭を一つほゞばりしとき

たのしみはつねに好める焼豆腐

うまく煮たてて食はせけるとき

多言するを須ひず、此等の歌が曙覽ならざる人の口より出で得べきか否かを考へ見よ。陽に清貧を樂しんで陰に不平を蓄ふるかの似而非文人が「獨樂吟」といふ題目の下に、果して饅頭、焼豆腐の味を思ひ出すべきか。彼等は酒の池、肉の林と歌はずんば、必ずや麥の飯、藜の羹と歌はん。饅頭、焼豆腐を取つてわざ／＼これを三十一文字に綴る者、曙覽の安心ありて始めてこれ有るべし。あら

面白の饅頭、焼豆腐や。

たのしみは錢なくなりてわびをるに

人の來りて錢くれし時

たのしみは物をかゝせて善き價

惜しみげもなく人のくれし時

曙覽は欺かざるなり。彼は錢を芥の如しと言はず、あどけなくも彼は錢を貰ひし時のうれしさを歌ひ出せり。猶正直にも彼は錢を多く貰ひし時の思ひがけなき嬉しさをも白狀せり。仙人の如き、佛の如き、子供の如き、神の如き、曙覽は、余理想界に於てこれを見る現實界の人間としては殆ど承認する能はず。彼の心や無垢清淨彼の歌や玲瓏透徹。

貧かくの如し、高かくの如し。一たびこれに接して畏敬の念を生じたる春嶽は、これを聘せんとして、侍臣をして命を傳へしめし

も、曙覽は辭して應ぜざりき。文を賣りて米の乏しきを歎き、意外の報酬を得て思はず打ち笑みたる彼は、こゝに至つて名利を見ること門前の土芥の如くなりき。臨むに諸侯の威を以てし、招くに春嶽の才を以てし、而して一曙覽をして破屋竹笋の間より起たしむる能はざりし者何が故ぞ。謙遜か、傲慢か、將彼の國體論は妄りに仕ふるを許さざりしか。いづれにもせよ、彼は依然として饅頭、焼豆腐の境涯を離れざりしなり。慶應三年の夏始めて秩祿を受くるの人となりしも、僅かに二年を経て明治二年の秋、彼は神の國に登りぬ。曙覽が古典を究め學問に耽りし事は別に説くを要せず、貧苦の中に居りて、机に千文八百文堆く載せたりといふ一事は、これを盡くして餘りあるべし。その敬神尊王の主義を現はしたる歌の中に、

高山彦九郎正之

大御門そのかたむきて橋の上に

項根突きけむ眞心たふと

をりにふれてよみつゞける

吹く風の目にこそ見えね神々は

この天地にかむづまります

獨樂吟

たのしみは戎夷よろこぶ世の中に

皇國忘れぬ人を見るとき

たのしみは鈴屋大人の後に生れ

その御諭をうくる思ふ時

赤心報國

國汚す奴あらばと太刀抜きて

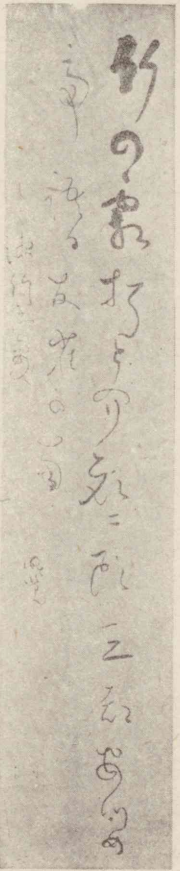
仇にもあらぬ壁に物いふ

示人

天皇は神にしますぞ天皇の

勅としいはばかりこみまつれ

極めて安心に、極めて平和なる曙覽も、一たび國體の上に想ひ到る時は、滿腔の熱血を灑ぎて、敬神の歌を作り不平の吟を爲す、慷慨



曙覽筆蹟

淋漓筆 劍の如し。又

筆蹟

竹の霜打とけ顔
に頭三つあつめ
て語る友雀かな
曙覽
疎竹三禽

平日の貧曙覽にあらず。その纒かに王政維新の盛典に逢ふを得たりし事彼に取りて、如何ばかり嬉しかりけん。

曙覽の歌が比較的何集の歌に似たりやと問はば、我も人も一齊に萬葉に似たりと答へん。彼が古今新古今を學ばずして萬葉を學びたる卓見は、我が第一に賞揚せんとする所なり。彼が萬葉を

學んで比較的善くこれを摸し得たる伎倆は、我が第二に賞揚せんとする所なり。そも、歌の腐敗は古今集に始り、足利時代に至つてその極點に達したるを、眞淵等一派古學を闢き萬葉を解き、やうやく一縷の生命を繋ぎ得たり。されど眞淵一派は萬葉を解きて萬葉を解かず、口には萬葉をたゝへながら、おのが歌は古今以下の俗調を學ぶが如きトンチンカンを演出して、笑ひを後世に貽したり。萬葉が遙かに他集に抽んでたるは論を俟たず、その抽んでたる所以は、他集の歌が毫も作者の感情を現はし得ざるに反し、萬葉の歌は善くこれを現はしたるに在り。他集が感情を現はし得ざるは感情を有りの儘に寫さざるがためにして、萬葉がこれを現はし得たるはこれを有りの儘に寫したるがためなり。曙覽の歌に曰はく、
いつはりのたくみをいふな誠だに

さぐれば歌はやすからむもの

「いつはりのたくみ古今集以下皆これなり。」誠の一字は曙覽の本領にしてやがて萬葉の本領なり。萬葉の本領にしてやがて和歌の本領なり。我が謂ふ所の「有りの儘に寫す」とは即ち誠に外ならず。後世の歌人といへども、誠を詠め、有りの儘を寫せと空論はすれど、その作る所の却つていつはりのたくみを脱する能はざるは、「誠」有りの儘の意義を誤解せるに因る。西行の如きは幾多の新材料を容れたる處、或はこの意義を解する者に似たれど、實際を見れば百中の九十九は皆いつはりのたくみなるを知らん。趣味を自然に求め、手段を寫實に取りし歌、前に萬葉あり、後に曙覽あるのみ。されば曙覽が歌の材料として取り來れるものは、多く自己周圍の活人事、活風光にして、題を設けて詠みし陳腐なる花月に非ず。その取材手法全く萬葉と揆を一にせり。さはれ曙覽は徹頭徹尾萬

葉を擬せんと務めたるにあらず、寧ろその思ふまゝを詠みたるが、自ら萬葉に近づきたるなり。曙覽が徳川時代の最後に出て、始めて濶眼を開き、多くの新材料・新題目を取りて歌に入れたる達見は、趣味を千年の昔に求めて目睫に失したる眞淵・景樹を驚かすべく、進取の氣ありて進み得ず、踏阻逡巡として姑息に陥りたる諸平・文雄を壓するに足る。徳川時代の歌人が僅かに客觀的趣味を解しながら、深くその蘊奥に入る能はざりしは、第一に「新言語・新材料」を入るべからずといふ從來の規定を脱却する能はざりしに因る。曙覽は先づこの第一の門戸を破りて歌界改革の一步を進めたり。これを要するに、曙覽の歌は、萬葉に、實朝に及ばざる事遠しといへども、貫之以下今日に至る幾百の歌人を壓倒し盡せり。新言語を用ひ、新趣向を求めたる彼の卓見は、歌學史上特筆して後に傳へざるべからず。彼は歌人として實朝以後の唯一人なり。眞淵・景樹

諸平・文雄輩に比すれば彼は鷄群の孤鶴なり。歌人として彼を賞讃するに千言萬語を費すとも過讚にはあらざるべし。若し夫れ曙覽の人品性行に至りては磊々落落世間の名利に拘束せられず、正を守り、義を取り、俯仰天地に愧ぢざる蓋し絶無僅有の人なり。

一三 獅子ヶ城

近松門左衛門

近松門左衛門
本名相森信盛
集林子と號した
淨瑠璃作者
享保九年歿（年
七十二）

表に轟く馬車御歸官と呼ばはつて、唐櫃先に昇入れさせ、優々たる絹傘も、さすが五常軍甘輝と名に負ふ其の物體。錦祥女出向ひ、「何とて早き御退出、御前は何と候ぞや。」されば、されば、韃靼大王、叡慮深く、過分の御加増、十萬騎の旗頭散騎將軍の官に任ぜられ、諸侯王の冠・裝束賜はり、大役仰付けらるゝ家の面目是に過ぎず」とありければ、それはお手柄めでたい、めでたい。のう家の吉事は重なるもの、日頃戀ひしい床しいと申し暮せし父上、日本にて設け給ひし

母兄弟頼みたき事ありとて、門外迄來り給へども、お留守といひ、嚴しき國の掟を憚り、男子は皆還し、母上ばかりを留置きしが、尙も上の聞えを恐れ、繩かけて、あれ、あの奥の亭にて御馳走は申せども、胎内借らぬ母上、繩かけし御心底悲しさよとぞ語りける。

「うむ、繩かけしとは能い料簡、上へ聞えて言譯あり。随分もてなせ。いざ先づ我も對面せん。案内申せ」といふ聲の漏れ聞えてや、妻戸の内、のう錦祥女、甘輝殿のお歸りか。爰は餘り高上り、わらはそれへと立出づる。容貌はいとど老木の松のしめからまれし藤葛起居苦しき其の風情、甘輝見る目も痛はしく、誠世の中の子と云ふ者のあればこそ、山川萬里を越え給ふ。其のかひもなき縛めは、時代の掟是非もなし。それ女房お手が痛むか、氣を付けよ。優曇華の客人聊疎略を存ぜず。何事なりとも此の甘輝が身に相應の事ならば、必ず心置かるゝな」と睦じく待遇せば、老母顔色打解けて、

「オ、頼もしい忝い。其の詞を聞くからは何しに心置くべきぞ。頼み入りたき大事密に語り申したし。是へ是へと小聲になり」のう我々此の度唐土へ渡りし事、娘ゆかしいばかりでなし。去年の初冬、肥前の國松浦が磯といふ所へ、大明の帝の御妹、梅檀皇女小船に召され吹流され、御代を韃靼に奪はれし御物語聞くと齊しく、父は素より明朝の廢臣、我が子の和藤内と申す者賤しき海士の手業ながら、唐土、日本の軍書を學び、韃靼大王を滅し、昔の御世に讎し、姫宮を帝位に即けんと先づ日本に残し置き、親子三人此の唐土へは來たれども、あさましや、草木迄皆韃靼に隨ひ靡き、大明の味方に心ざす者一人も候はず。和藤内が片腕の味方に頼むは甘輝殿、力を添へて下されかし、偏に頼み參らす。是が拜む心ぞ」と額を膝に押しさげ押し下げ、唯一筋の志、思ひこうでぞ見えにける。

甘輝大きに驚き、ムウ、さては聞及ぶ日本の和藤内と申すは、此の

錦祥女とは兄弟、鄭芝龍一官の子息候な。ム、武勇の程唐土迄も隠れなく、頼もしき思ひ立ち、尤も斯うこそあるべけれ。我等も先祖は大明の臣下、帝亡び給ひてより頼むべき主君なく、韃靼の恩賞蒙り月日を送る折柄、望む所の御頼み。早速味方と申したきが、少し存ずる旨あれば、急にあつとも申されず。篤と思案しお返事を」と、いはせも果てず、ア、そりや御卑怯な、詞が違ふ。是程の大事口より出せば、世間ぞや。思案の間に漏聞えて、不覺を取り、悔んでも返らず。お恨みとは思ふまじ、成れ成らざれ、お返事を、サア、只今」と責めつくれば、ムウ、急に返答聞きたくば、易い事、易い事。如何にも五常軍甘輝、和藤内が味方なり」といふより早く、錦祥女が胸元取つて引寄せ、劔引抜いて咽喉に差當つる。

老母周章てて飛蒐り、二人が中へ割つて入り、持つたる手を踏放し、娘を背中に押しやり、押しやり、仰向に重なり臥し、大聲上げて「是

情なや、何事ぞ。人に物を頼まれては、女房を刺殺すが唐土の習か。心に染まぬ無心を聞くも、女房の縁ある故と心腹が立つての事か。但しは狂氣か。偶、始めて来て見たる母親の目の前で殺さうとする無法人。日頃が思ひやられた。味方をせずばせぬ迄よ。今迄と違うて親のある大事の娘。是、怖い事はない。母にしつかり取りつきや」と隔ての垣と身を捨てて圍ひ歎けば、錦祥女夫の心は知らねども、母の情の有難さ。「怪我遊ばすな」とばかりにて、共に涙に咽びけり。

甘輝飛退つて、オ、御不審は御尤も。全く某無法にあらず。狂氣にも候はず。昨日韃靼王より某を召し、此の頃日本より和藤内といふえせ者、少乏^{せうはく}下劣^{げら}の身を以て、智謀軍術逞しく、韃靼王を傾け大明の世に翻さんと、此の土に渡る。彼が討手誰ならんと、數千人の諸侯の中より、此の甘輝を選出され、散騎將軍の官に任じ、十萬騎

の大將を賜はる。和藤内を我が妻の兄弟と今聞くまでは夢にも知らず。彼奴日本に傳へ聞く楠とやらんが肝膽を出て、朝比奈辨慶とやらんが勇力ありとも、我亦孔明が腸に分け入り、樊噲、項羽が骨髓を借つて一戦に追つて追ひまくり、和藤内が月代首提げて來らんと廣言吐きし某が、一太刀も合せず、矢の一本も放さず、ぬくぬくと味方せば、五常軍甘輝が日本の武勇に聞怖ぢする者でなし。女に絆され縁に引かれ、腰が抜けて弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雜口にかけれんは必定。然れば子孫末孫の恥辱遁れ難し。恩愛不便の妻を害し、女の縁に引かれざる、義信の二字を額に當て、さつぱりと味方せん爲、ヤイ錦祥女、留むる母の詞には慈悲心籠り、殺す夫の劔の先には忠孝籠る。親の慈悲と忠孝に命を捨てよ、女房と理非を飾らぬ勇士の詞。「オ、聞分けた。身に適うた忠孝親に貰うた此の體、孝行のため捨つるは惜しいとも思はぬ」と、母を押し

けつゝと寄り、胸押明くれば、引きよせて、見る目危き氷の劔。「なう悲しや」と駈隔て、押分けんせん方なく、退けんとするに手は叶はず。娘の袖に喰付いて引退くれば、夫が寄る。夫の袖を啜へて引けば、娘は死なんと又立寄るを、口に啜へて、唐猫の嗚を換ふる如くにて、母は目もくれ身もつかれ、わつとばかりにどうと伏し、前後不覺に見えければ、錦祥女、縋りつき、二生に親知らず。終に一度の孝行なく、何ぞ恩を送らうぞ。死なせて給べ、母上」と、口説き歎けば、わつと泣き、のう悲しい事いふ人や。殊に御身は娑婆と冥途に親三人。残り二人の父母は産落した大恩あり。中に一人の此の母は、憐みかけず恩もなく、うたてや、繼母の名は削つても削られず。今爰て死なせては、日本の繼母が三千里隔てたる唐土の繼子を惡んで見殺しに殺せしと、我が身の恥ばかりかは、普く口々に日本人は邪慳なりと國の名を引出すは、我が日本の恥ぞかし。唐を照らす

日影も、日本を照らす日影も、光に二つはなけれども、日の本とは日の始め、仁義五常情あり。慈悲専らの神國に生を受けたる此の母が、娘殺すを見物し、そも生きて居られうか。願はくは、此の繩が日本の神々の注連繩と顯れ、我を今絞殺し、屍は異國に曝すとも、魂は日本に導き給へ」と聲を上げ、道もあり情もあり、哀れも籠るくどき泣き。錦祥女は、縋りつき母の袂のもろ涙。甘輝も道理に至極し、そぞろ涙に暮れけるが、稍あつて甘輝席を打つて、「ハツア是非もなし、力なし。母の承引なき上は、今日より和藤内とは敵對。老母を是に留め置き、人質と思はれんも本意ならず。輿車用意して所を尋ね送り返し參らせよ。「いや送るまでもなく、此の遣水より黄河迄よき便りには白粉流し、叶はぬ知らせは紅を流す約束にて、迎ひにお出ある筈。いで紅解いて流さん」と常の一間に入り、にけり。母は思にかきくれて、思ふに違ふ世の中を立歸りて、夫や子に、何

と語り聞かせんと思ひやる方涙の色。紅より先の唐錦。錦祥女は其の隙に瑠璃の鉢に紅解き入れ是ぞ親と子が渡らぬ錦中絶ゆる。名残は今ぞと夕波の泉水にさらくく、落ち瀧津瀬の紅葉と浮世の秋をせき下し共に染めたる泡沫も紅くぐる遣水の落ちて黄河の流れの末和藤内は岸頭に蓑うち被き座をしめて赤白二つの河水に心を付けて水の面南無三寶紅が流るゝ。さては望は叶はぬ。味方もせぬ甘輝奴に母は預け置かれずと踏出す足の早瀬川流をとめて行くさきの堀を飛越え堀を乗越え籬透垣踏破り、甘輝が城の奥の庭泉水にこそ着きにけれ。

先づ母は安穩嬉しやと飛上り、縛めの繩引きちぎり、甘輝が前に立ちほだかり、五常軍甘輝といふ髭唐人はわ主よな天にも地にもたつた一人の母に繩かけたは、おのれをおのれと奉つて、味方に頼まん爲なるにもつてうずれば方圖もない。味方にならぬは此の



(原本挿繪)

獅子ヶ城

大將が不足なか。第一女房の縁といひ其方から従ふ筈。サア日本無隻の和藤内が直付に頼む返答せい。と柄に手をかけ突立ちたり。「オ、女房の縁といへば猶ならぬ。御邊が日本無隻なれば、我は唐土稀代の甘輝。女に絆され味方する勇士にあらず。女房を去る處もなし。病死するまで便々とも待たれまい。追風次第にはや歸れ。但し置土産に首が置いて行きたいか。いやさ、日本の土産にうぬが首を」と兩方抜かんとする所を錦祥女聲をかけ「ア、ア、是のうのう病死を待つ迄もなし。唯今流せし紅の水上を見給へ」と衣裳の胸を押開けば、九寸五分の懐劍

乳の下より肝さき迄横に縫うて刺通し、朱に染みたる其の有様母は是はとばかりにて、かつばと伏して正體なし。和藤内も動轉し、覺悟を極めし夫さへ、そぞろに驚くばかりなり。

錦祥女苦しげに、母上は日本の國の恥を思召し殺すまいとなさるれど我が命を惜しみて親兄弟を貢がずば、唐土の國の恥、とかうなる上は女に心引かざる、人の誹はよもあるまじ。のう、甘輝殿親兄弟の味方して、力ともなつてたべ。父にも斯くと告げてたべ。もう物いはせて下さるな、苦しいわいの」とばかりにて、消えく」とこそなりにけり。

甘輝涙を押穩し、オ、出来いた、出来いた。自害を無にはさせまい。和藤内が前に頭をさげ、某先祖明朝の臣下。進んで味方申すべき身の女の縁に迷ひしと、俗難を憚りしに、我が妻唯今死を以て義を勧むる上は心清く御味方。大將軍と仰ぎ、諸侯王に準へ御名

を改め、延平王國性爺鄭成功と號し、裝束召させ奉らん」と武運開くる唐櫃の、二重の錦羅綾の袂、緋の裝束、章甫の冠、花紋の沓、珊瑚琥珀の石の帶、莫耶の劔金を磨き、絹傘さつとさしかくれれば、十萬餘騎の軍兵ども、幢の旗、幡の旗、吹拔き、楯、鉾、弓、鐵砲、鎧の袖を列ねしは、會稽山に越王の再び出でたる如くなり。

母は大聲高笑ひ、ア、嬉しや、本望や、あれを見や、錦祥女。御身が命を捨てしゆゑ、親子の本望達したり。親子と思へど天下の本望。此の劔は九寸五分なれど、四百餘州を治むる自害。此の上に母が存へては始めの詞虚言となり、再び日本の恥を引起す」と娘の劔をおつ取つて咽にがばと突立つる。人々是はと立騒げば、ア、寄るまい、寄るまい」とはつたと睨み、のう甘輝、國性爺母と娘の最期をも、必ず歎くな、悲しむな。韃靼王は面々が母の敵、妻の敵と思へば、討つに力あり。氣をたるませぬ母の慈悲、此の遺言を忘るゝな。父

一官がおはすれば、親には事を缺くまいぞ。母は死して諫をなし、父は存へ教訓せば、世に不足なき大將軍。浮世の思出是迄」と肝のたばねを一抉り切りさばき、「サア錦祥女、此の世に心残らぬか。」何しに心残らん」といへども、残る夫婦の名残、親子手を取り引寄せて、國性爺が出立を見上げ、見下し、嬉しげに、笑顔を娑婆の形見にて一度に息は絶えにけり。

一四 巢林子の藝術

藤村 作

一 世話浄瑠璃

近松巢林子は愛の藝術家といはれてゐる。彼の名を不朽ならしめてゐる二十四曲の世話浄瑠璃の人物は、皆巢林子の博大な愛の胸に抱かれて、冷酷な當時の常識的批判因襲の道義的非難から保護されてゐるのである。巢林子はかういふ意味に於て、愛の藝

術家である愛の人である。

世話浄瑠璃を通じて見れば、巢林子の人格はその歳を重ねて行く間に發展し、晩年に至つて一層博く且深くなつたと思はれる節がある。

前期の作には敵役といふ方便的人物の外、人物に悪人なく、不所存親不孝の題材にも、忌むべき動機がないのを一般とする。場合に由つては人物に道念の強い人物があり、情死などの動機にさへ道義的なものがある。この點に於ていづれの人物にも立派な所があり、愛すべき所がある。殊に彼等が義理の爲に、同情の爲に、直ちに死を決する所は、恰も武士が忠義の爲に死を鴻毛の輕きに比したやうなものである。健氣といへば健氣である。その死は立派といへば立派であるが、實際の人間としては餘りに生を軽く見過ぎて、人間味がすくない。一本の絲にでも縋つて一日でも現實

西鶴
井原氏
浮世草紙の作者
元祿六年歿

を享樂しようとする西鶴の作中の人物の方が人間的である。私どもは巢林子が曲中の死んで行く人物に、一通りの理解と同情とは持ち得るけれども、此の死に思ひきりのよすぎる點に於ては眞の理解と同情とを持ち得ない。

後期の作にはかういふ人物ばかりと限らない。臆病未練な人物もあり、非道の人物もある。それだけ我々には見知り越しの間である。此等の人物は、その行跡の上でいへば愚者未練者たることは明かであるけれども、賤しむべき又惡むべき所はない。畢竟作者の博い愛が注がれてゐるからである。

かく前期後期の作を並べて比較して見ると、前期の作中の人生は比較的完全に近い人物事件が作者の爲に徳化され浄化されて、そこに智も徳もそれを實行する意志も見えるのである。この人物事件の徳化浄化といふことは、巢林子の「慰み」の基礎に立つた藝

術觀から意識的になされたものでもあるが、彼の同情の愛が自然にかく徳化して見せたことも勿論否定されぬことと思ふ。併しながら尙深く考察すると、巢林子の性格は之を西鶴などに比べると保守的である。随つてその思想は因襲的である。西鶴が勃興の元祿町人の生活の基調を確實に把持して、猛烈な物質慾と盲目的に奔放な享樂精神とを彼の藝術中の人生の根本に据ゑてゐるに拘らず、巢林子は舊道徳や固定した慣習を重んじて、所謂義理と人情の葛藤に悩まざる、人生に満腔の同情を注いでゐる。これに由つて見れば、彼は前期に於ては性格の弱點に満ちたまゝの人間、不義不徳の相を暴露したまゝの事件には同情し得なかつたのではあるまいか。即ち彼の愛の博さはこの種の人物事件を容れ得ない程のものであつたのではあるまいか。それが年月を経るに随ひ、巢林子自身の人格が發展して、彼のもとより博かつた愛が

一層博大となつて、醜惡なる相をもつたまゝに、人物事件に深い愛情を感じ得るやうになつたのではあるまいか。



近松巢林子

巢林子の作を読んだ時の心持を顧みてみると、何ともいひ様のない懐かしさ、暖さを感じるのである。事件は何れも悲惨であり、人物は何れも教養の足りないものがあり、そのものの生涯は缺陷の多いものであるのに、何故かく懐かしく暖く感ずるのであらう。その譯は色々あり得るが、私は事件・人物を包み得てあまりある作者自身の博大な愛そのものに引きつけられる感じが主なものであらうと思ふ。この愛は、曲全體の上を何處となく蔽うてもあるが、又隨所に印象の深い、人情に徹した名文句とな

つて滲み出てもある。かゝる曲を読んでかゝる愛に接することは、その他の點を措いて、たゞそれだけでも、我々に取つては愉快なことである、有效なことである。

二 時代淨瑠璃

巢林子の時代淨瑠璃は、悉く武家精神の通俗宣傳たるものである。元祿時代は主従の上下關係と、軍人たる職責を基礎として成立した武士精神と、個人の福利を營むを本務とした町人精神とが、階級的に獨立して、未だその相互の浸潤感化を著しくしなかつた時代である。武士も武士らしい武士であれば、町人も町人らしい町人であつた時代である。その後、兩階級の間、に兩精神の浸潤感化が次第に行はれて來たのである。武士の町人化は、武士本位の時代であつたから、武士の墮落として政治當局者や識者の憂となつたのであるが、町人の武士化は、それが階級制を壞すやうなこと

でないかぎり、多く問はれなかつた。のみならず實際町人の徳操、品位を高めたものはその感化に由つたのである。この武士精神を町人間に宣傳して町人の武士化を促した上に、近世の所謂通俗文藝の功の多い事は言ふ迄もあるまい。

巢林子はこの方面に於ても、蓋しその尤なるものである。彼は新淨瑠璃の陣頭に立つた人で、彼によつて淨瑠璃文學は大成せられ、爾後の作者は一人として直接間接にその感化を受けてゐないものはない。極端に言へば悉く摸倣追隨者である。かうして彼に依つて大成された新淨瑠璃時代物の内容は、殆ど彼以來固定した有様であるが、その中心をなすものは武士道精神に他ならぬ。時代の選み方は、王朝時代であらうと、武家時代であらうと、又場所が我が國であらうと、外國であらうと、説話の根幹となつてゐる精神は常に近世武士道精神である。此の精神を表現するに、彼は彼

馬琴
瀧澤氏
小説家
嘉永元年歿

の所謂「慰み」を目的とした民衆的な藝術の衣裳を以てした。彼のなした時代錯誤や階級混同は彼の無智無學から起つたのではなくして藝術上に意識した目的から來た事である。彼はこれ位の事を知るだけの歴史の知識は持つて居たに相違ないが、無智な民衆の娛樂を目的とした爲にこれを犯すことを辭しなかつたのであらう。この事を教化の上から考へて見れば、寧ろ彼の藝術の強みである。彼の藝術意識が馬琴などの如き儒教風の功利的教訓主義のそれではなかつた爲に彼の藝術は馬琴の如き淺膚露骨な教訓物に墮せず済んだ。併し教訓物に墮しなかつた所が、教化上一層有効であつたに相違ない。武士精神を主要内容として、通俗的で受け容れ易く美しい麗しい色と甘い味とをつけられた娛樂的な藝術の形で創作され、作毎に一代の人心を沸かしたものであるから、その社會教化上の効果の尠くなかつた事は想像するに難く

ないのである。唯政治家の事業の如く、若しくは學者の著述の如く、その効果を計る尺度のない爲に、或は世人に看過され易いが、若しこゝに是等を平等に計量し得べき方法があるならば、彼の直接・間接の社會教化上の業績は、なかく偉大なものであつたらうと思ふ。

—上方文學と江戸文學—

一五 出 廬

土 井 晚 翠

土井晚翠

名は林吉

仙臺市の人

英文學者

詩人

南陽

中華民國河南省

南陽府

嗚呼南陽の舊草廬
夢はたいかに安かりし
隴畝に民とまじはれば
ただ一曲の梁父吟

二十餘年のいにしへの
光を韜み香をかゝし
王佐の才に富める身も

閑雲野鶴空ひろく

風に嘯く身はひとり

月を湖上に碎きては
ゆふべ暮鐘に誘はれて

ゆくへなみまの舟一葉
訪ふは山寺の松の風

江山さむるあけぼのの
寒梅瘦せて春はやみ
伴は野鳥の暮の歌
誰そや碁局の友の身は

雪に驢を驅る道の上
幽林蔭をうがつとき
紫雲たなびく洞の中

その隆中の別天地
大盜きはひはびこりて
風の枯葉を掃ふごと
世は一局の碁なりけり

空のあなたを眺むれば
荒びて榮華さながらに
治亂興亡おもほへば

隆中

中華民國湖北省
襄陽縣の西

その世を治め世を救ふ
名利を俗に求めねば
亂れし世にも花は咲き
うつりはここに二十七

經綸胸にあふるれど
岡も臥龍の名を負ひつ
花また散りて春秋の

高眠遂に永からず
君が三たびの音づれを
羽扇綸巾風からき
草廬あしたの主や誰

信義四海に溢れたる
背きはてめや知己の恩
姿は變へて立ちいつる

古琴の友よさらばいさ
残月の影よさらばいさ
蒼猿ねむれ谷の橋

あかつきささむる西窓の
白鶴かへれ嶺の松
岡も更へよや臥龍の名

草廬あしたは主もなし

成算むねに藏りて
ただ掌上に指すがごと
見よ九天の雲は垂れ
蛟龍飛びぬ淵の外

乾坤ここに一局碁
三分の計はや成れば
四海の水は皆立ちて

―天地有情―

一六 隅田川

ワキ
渡守

ワキ
渡守

ワキ詞是は武藏國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人々を
渡さばやと存じ候。又此の在所にさる仔細有つて大念佛を申す
事の候間僧俗を嫌はず人数を集め候。其の由皆々心得候へ。男
次第謹末も東の旅衣末も東の旅衣日も遙々の心かな。詞かやうに
候者は都の者にて候。われ東に知る人の候程に彼の者を尋ねて

只今まかり下り候。道行謠雲霞あと遠山に越えなしてあと遠山に越えなして、幾關々の道すがら國々過ぎて行く程に、ここぞ名に負ふ隅田川、渡りに早く著きにけり。渡りに早く著きにけり。

詞急ぎ候程に、是は早隅田川の渡りにて候。又あれを見れば舟が出て候。急ぎ乗らばやと存じ候。如何に船頭殿舟に乗らうずるにて候。ワキ詞なかくの事召され候へ。先々御出で候あとの、けしからず物騒に候は何事に候ぞ。ツレ詞さん候都より女物狂の下り候が、是非もなく面白う狂ひ候を見候よ。ワキ詞さやうに候はば、暫く舟を留めて、彼の物狂を待たうずるにて候。

シテ、サシ諺實にや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の道行人に言傳てて、行方を何と尋ぬらん。聞くや如何に、上の空なる風だにも、地謠松に音する習あり。シテ諺「眞葛が原の露の世に、地謠身を恨みてや明け暮れん。シテ諺是は都

ツレ
旅人

シテ
狂女
人の親の心は闇
にあらねども子
を思ふ道に迷ひ
ぬるかな 後撰
集(平兼輔)



(筆花耕村山)

(能)川田綱

北白河に年經て住める女なるが思はざる外に一人子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の關の東の國遠き、東とかやに下りぬと聞くより心亂れつつ、そなたとばかり思ひ子の跡を尋ねて迷ふなり。地謠千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、上歌地謠「もとよりも契假なる一つ世の契假なる一つ世の、其の中をだに添ひもせて、ここやかしここに親と子の、四鳥の別れ是なれや。尋ぬる心の果やらん、武藏の國と下總の中にある、隅田川にも著きにけり。隅田川にも著きにけり。

候へ。ワキ詞お事はいづくより何方へ下る人ぞ。シテ詞是は都より

名にしおはば
この歌伊勢物語
にも、古今集に
も出てゐる

人を尋ねて下る者にて候。ワキ詞都の人といひ狂人といひ面白う
狂うて見せ候へ。狂はずば此の舟には乗せまじいぞとよ。シテ詞
「うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乗れとこそ承る
べけれ。誰かたの如くも都の者を、舟に乗るなと承るは、隅田川の
渡守とも覚えぬ事な宣ひそよ。ワキ詞實に、都の人とて、名にし
負ひたる優しさよ。シテ詞なう、其の詞はこなたも耳にとまるもの
を、彼の業平も此の渡りにて、誰名にし負はば、いざ言問はん都鳥我
が思ふ人は有りやなしやと。詞なう舟人、あれに白き鳥の見えた
るは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。ワキ詞あ
れこそ沖の鷗候よ。シテ詞うたてやな浦にては千鳥とも云へ鷗と
も云へ、など此の隅田川にて白き鳥をば都鳥とは答へ給はぬ。ワキ詞
「實に實に誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答
へ申さで、シテ誰沖の鷗と夕波の、ワキ詞昔にかへる業平も、シテ誰有りや

無しやと言問ひしも、ワキ詞都の人を思ひ妻、シテ誰わらはも東に思ひ
子の、行方を問ふは同じ心の、ワキ詞妻を忍び、シテ誰子を尋ぬるも、ワキ詞
「思はおなじ、地誰我も又、いざ言問はん都鳥、いざ言問はん都鳥、我が
思ひ子は東路に、有りやなしやと問へども問へども答へぬは、うた
て都鳥鄙の鳥とやいひてまし。實にや舟競ふ堀江の川の水際に、
來居つつ鳴くは都鳥、其は難波江、此は又、隅田川の東まで思へば限
りなく、遠くも來ぬる物かな。さりとは渡守、舟舉りて狭くとも、
乗せさせ給へ渡守、さりとは乗せてたび給へ。ワキ詞かかる優し
き狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。此の渡りは大事の渡
りにて候。構へて靜かに召され候へ。ツレ詞なう、あの向ひの柳の
下に、人の多く集まりて候は何事にて候ぞ。ワキ詞さん候、あれは大
念佛にて候。それにつきて、あはれなる物語の候。此の舟の向ひ
へ著き候はん程に、語つて聞かせ申さうずるにて候。誰さても去

年三月十五日しかも今日に相當りて候、人商人の都より、年の程十
二三ばかりなる幼きものを買ひとつて奥へ下り候が、此の幼きもの、
いまだ習はぬ旅の疲れにや、以ての外に違例し、今は一足も引か
れずとて、此の河岸にひれふし候を、なんぼう世には情なきもの
候ぞ、此の幼きものをば其のまま路次に捨てて、商人は奥へ下つて
候。さる間、此の邊の人々、此の幼きものの姿を見候に、由ありげに
見え候程に、さまざまに痛はりて候へども、前世の事にててもや候ひ
けん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづく、如何
なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、我は都北白河に、吉
田の何某と申しし人の唯ひとり子にて候が、父には、後れ、母ばかり
に添ひ參らせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになり行き
候。都の人の足手影もなつかしう候へば、此の道の邊に築き籠め
て、しるしに柳を植ゑて給はれと、おとなしやかに申し、念佛四五遍

唱へ、遂に事終つて候。なんぼう哀れなる物語にて候ぞ。見申せ
ば、船中にも少々都の人もござありげに候。逆縁ながら念佛を御
申し候ひて御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が著いて候。とう
とう御上り候へ。ツレ詞如何さま今日は此所に逗留仕り候ひて、逆
縁ながら念佛を申さうするにて候。

ワキ詞如何に是なる狂女、何とて船よりは下りぬぞ。急いで上り
候へ。あら優しや、今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。なう、急い
で舟より上り候へ。シテ詞なう舟人、今の物語はいつの事にて候ぞ。
ワキ詞去年三月今日の事にて候。シテ詞さて其の兒の年は。ワキ詞十
二歳。シテ詞主の名は。ワキ詞梅若丸。シテ詞父の名字は。ワキ詞吉田
の何某。シテ詞さて其の後は親とても尋ねず、ワキ詞親類とても尋
ねこぞ、シテ詞まして母とても尋ねぬよなう。ワキ詞思ひもよらぬ
事。シテ詞蓋なう親類とても親とても尋ねぬこそ理なれ。其の幼き

者こそ、此の物狂が尋ぬる子にては候へとよ。なう是は夢かや、あらあさましや候。ワキ詞、言語道斷の事にて候物かな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや。あら痛はしや候。かの人の墓所を見せ申し候べし。こなたへ御出で候へ。

シテ謠、今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今は此の世になき跡の、しるしばかりを見る事よ。さても無慙や、死の縁とて、生所を去つて東の極の道のほとりの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、此の下にこそ在るらめや。地謠、さりとは人々、此の土をかへして、今一度此の世の姿を、母に見せさせ給へや。上歌、残りても、かひ有るべきは空しくて、かひあるべきは空しくて、有るはかひなき帚木の、見えつ隠れつ面影の定めなき世の習、人間憂ひの花盛、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲覆へり。

實に目の前のうき世かな、げに目の前のうき世かな。

ワキ詞、今は何と御嘆き候ひてもかひなき事。唯念佛を御申し候ひて、後世を御弔ひ候へ。謠、既に月出て川風も、はや更け過ぐる夜念佛の時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らし勸むれば。シテ謠、母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯ひれふして泣き居たり。ワキ詞、うたてやな、餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふべけれど、謠、鉦鼓を母に參らすれば。シテ謠、我が子の爲と聞けばげに、此の身も覺鐘を取り上げて。ワキ謠、嘆きをどめ聲澄むや。シテ謠、月の夜念佛もろともに、ワキ謠、心は西へと一寸ぢに、ワキ謠、南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌陀佛。地謠、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ謠、隅田河原の波風も、聲立て添へて、地謠、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ謠、名にし負はば、都鳥も音を添へて、子方、地謠、南

子方
梅若丸の靈

無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

シテ詞なうなう今の念佛の内に正しく我が子の聲の聞え候。此の塚の内にて有りげに候よ。ワキ詞我等もさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をば止め候べし。母御一人御申し候へ。シテ謹今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。子謹南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、地誦聲の内より幻に見えければシテ謹あれは我が子か、子謹「母にてましますかと、地誦互に手に手を取りかはせば、又消え消えとなり行けば、いよいよ思ひはます鏡面影も幻も見えつ、隠れつする程に、東雲の空もほのぼのと明け行けば、跡絶えて、我が子と見えしは塚の上の草茫茫として、唯しるしばかりの浅茅が原となるこそあはれなりけれ。なるこそあはれなりけれ。」
— 謹曲集 —



後藤新平
岩手縣の人
伯爵
政治家
昭和四年歿（年
七十三）

一七 海外發展の要諦

後藤新平

建國以來、遼々二千五百年の久しきに互り、特殊なる地理を背景とし、特殊なる文明の綾を織り成し、特殊なる生活劇を演じ來れるもの、是日本民族である。實に我が日本民族は、その特殊なる背景の前に展開した萬古不易の國體と、東西無比の民族性とももつてゐる。のみならず、聽ては世界的大發展を遂げんとする潑刺たる意氣と雄圖とを抱いてゐる。併しながら絶海の孤島に生ひ立ちたるが爲に、日本民族は、鉢植の公孫樹に類するものがある。亭々として蒼穹を摩すべき偉大なる素質を有しながら、根柢を一杯土に托し、る身の悲しさに、思ふさま根を伸ばし、枝を張り得ざる公孫樹の姿は、是やがて日本民族の現下の姿ではあるまいか。
日本民族をこの狭い天地より救ひ出して、世界的沃野に移し植

ゑんとするもの、即ち予が海外發展論の本旨である。言ひ換へれば、第一次には我が國を世界の日本となし、第二次には世界を日本の世界となすべき使命を遂げること、是ぞ我々日本民族の理想であり、大精神であらねばならぬ。

我が皇室が日本民族の總本家として、悠久無比なるは、猶公孫樹が前世界より稀に残存する名木にして、たゞ我が日本に於てのみ生長・發育するが如く、眞に歴史上の奇蹟的美觀である。我々は是非ともこの世界の名木を以て自任し、我々日本民族を廣き地球上に繁茂せしむることを使命としてゐることを覺悟しなければならぬ。併しながら、世界は沃野で天然及び人爲の肥料に富むと共に、また種々の瘴癘あり、災害あることを忘れてはならぬ。是等の災害に打勝つて、自己の生命を培ひ育てるには、非常の努力を必要とする。即ち我々は、世界の文明を吸収して、日本特有の文化に

資せんとするに當つて、營養物の良否を選り分ける識見、絶えず外より襲ひ來る災害に抵抗する弾力をもたなければ、自ら文明病に罹ることを免れない。されば日本民族をして、この職能と抵抗力とを得しめることが第一の急務である。

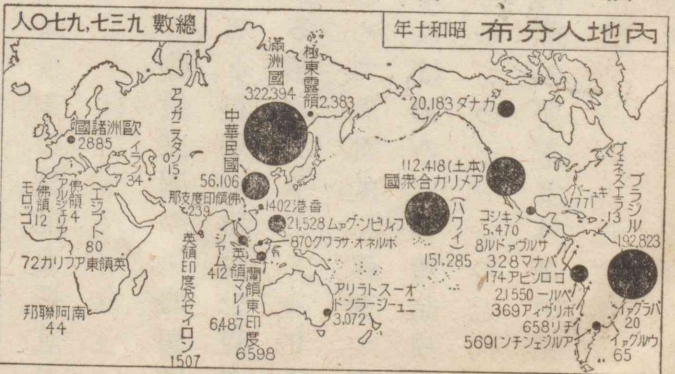
今や我々日本民族の脚下には、一碧萬頃^女の物質文明の沃野が開いてゐる。そして是を包むに、近代的の空氣と、科學の彩雲を以てしてゐる。所謂近代文明の我々を衝動する刺激は、華美であり、壯麗である。併しながら、その華美壯麗は、極めて刹那的には強く、我の眼を刺激するけれども、久しきにわたれば寧ろ内容の空虚に一種の寂しさ物足りなさを覺えしめるものである。この近代文明は不自然にして不具なるが爲であり、内部の要求と外部の生活とが調和を缺いてゐるが爲である。

是等一切の不自然にして不健全なる要素が相合して、毒酒の如

き世紀末の頽廢思潮を醸成した。けれども人間の生命力は岩を裂く急潭よりも熾烈に猶弾力に富んでゐる。生命の伸びんとする要求は、何物の障害をも突破して、その芽をふき根を張らずにはゐない。自然の伸張を妨げる一切の虚偽、一切の假面を擺脫せんとする努力、その結果は絶えず争闘を續け、優勝劣敗の活劇となるのは、生物界の原則である。

かの世界戦争は、これを内部的に解すれば、人間生命の活火が、虚偽の文明、虚偽の平和、虚偽の結合、虚偽の妥協を破壊せんとして爆發したものである。即ち生命を失へる舊き文明を破壊して、

世界戦争
西紀一九一四年
から一九一九年
に亘つた世界大
戦



日本海外發展要図

最も自然なる最も健全なる新しき文明を創造せんとする産みの苦しみ、それが即ち世界戦争である。故に世界戦争は、既に生命を失ふべき十九世紀の老朽文明に最後の止めを刺し、將に現れんとする二十世紀の新鮮なる文明の大誕生を助けんとしたものである。従つて世界戦争の終結と共に、世界の思想に一大廻轉を來したことは甚だ自然のことである。古來、戦争は事物の母なりといふ諺がある。トライチケが「永久的平和を夢みて遊惰に傾く國民は疲弊困憊せる癡者なり」と言つたのは、痛快に文明病に罹れる國家の運命を豫告したものである。戦争はこれが外科的療治として卓効ある大手術、大淘汰に外ならぬ。次いで來るべきものは、新生命の發見である。廢頽的舊思想の革新である。この時に際して、我が大和民族は果して如何なる覺悟を持たなければならぬか。

トライチケ
ドイツの史家、
政論家
(西紀三編一七八
卷)

世界に民族の數多しと雖も、日本民族ほど世界に無比な民族はないのである。皇室と國民との關係が、義は君臣にして情は即ち父子の如き状態にあること、驚くべき生々發展力を有する同化的進取的國民であるといふこと、是等の事實のみにても、世界何處の民族にもその匹敵あるを知らない。我々はこの世界に冠絶せる民族精神を益、大ならしめ、有意義たらしめ、日本民族の理想の實現に努力しなければならぬ。偏に頽廢せる歐米文物の吸収にのみ沈湎して、自己を忘れたる無自覺なる摸倣をなし、彼に同化せられる方向に歩むのみであつてはならない。我は飽くまでも主にして、彼は飽くまで従てなければならぬが、偏狹なる排外主義的國論と、所謂民族的自覺とは別のものである。我々は再び日本民族を學び、日本民族の偉大性を色讀しなければならぬ。そこに我等の無窮の生命があり、生々不死の發展がある。

日本は貧乏である。富の程度に於て、物質的生産力に於て、遙かに西洋に及ばないことは確かに現在の事實である。けれども、若し日本人にして生々發展の元氣を有し、民族的團結力を有し、堅實な道義心を有し、鞏固な國家的觀念を有し、民族固有の精神、建國の本義を遵奉し、體得してゐるならば、敢へて深くそれ等の物質的方面の缺乏を悲觀する必要はない。予の憂へるところは、我が國粹の滅亡、大和魂の頽廢である。この患さへないならば、他の一切は固より第二第三の問題であつて、多く問ふを要しない。

嘗てウキルヘルム三世が國歩の艱難に際して下したる勅語には、次の語が見えてゐる。曰く、

「國家は、その有形的の力に失ひたる處を補充するに、精神的の力を以てせざるべからず」と。日本民族が益、進んで世界的の大民族たらんとするには、先づ何よりも重大なる要件として、國民の一人

御宸翰
明治元年三月十
四日發布の御宸
翰の一部

一人が孰れも鞏固なる國家的精神を抱き、民族的自覺の眼を覺さなければならぬ。畏れ多くも、明治天皇の御宸翰の中には、朕ココニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ、列祖ノ御偉業ヲ繼述シ一身ノ艱難辛苦ヲ問ス親ラ四方ヲ經營シ汝億兆ヲ安撫シ遂ニ八萬里ノ波濤ヲ拓開シ國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富岳ノ安キニ置ン事ヲ欲ス

とある。萬里の波濤を開拓し、國威を四方に宣布することは、明治天皇の世界的氣魄を示されたもので、固より建國の精神を一層明快に現代的に述べさせられたものに外ならない。

かくの如き勃々たる世界雄飛の思想、膨脹發展の思想は、嘗に御歴代の天皇の大御心の中に宿つてゐたばかりでなく、日本民族全體の血管の中に、常に湧き立ち、絶えず脈打つてゐたことを忘れてはならない。その民族的精神が現れて、或は桃太郎の鬼ヶ島退治

の童話となり、實際には神功皇后の三韓の役となり、倭寇となり、豊太閤の朝鮮の役となり、或は日清戦争となり、日露戦争となり、朝鮮の併合となつたのである。我々は悉くこの志を以て、相團結し、相協力して、民族的大精神、我が國粹の發揚に全力を傾倒したならば、國家の隆々として世界に光被し發展すべきは疑念を容れない。

現代に於ける列國の情勢を觀るに、獨逸は、その協同統治者としてのユダヤ人を排斥し、民族的實力に於て徹底的に威を振ひ、物心兩面を支配せんとする抱負を示してゐるが、英國はいまや世界的膨脹の極度に達し、まさに爛熟の頂點に立ちつゝあるかの感なきを得ない。而して露國は、その尨大なる土地と人口とを以て、しかも文化の低級なると、内在的破壊力の熾烈なるとに禍せられて、十分世界政策に意を用ふるの餘裕を缺いてゐる。佛國は、今日既にその進取的な發展力の營みを停止せる有様で、世界的民族競争の

第一線に立つて活躍するには、大なる國民的努力が必要であらう。列國の情勢既にかくの如くである。我等は斷じて躊躇逡巡すべき時ではない。偷安逸樂を貪るべき時ではない。益、その膨脹力を鼓し、開國進取の旗を押し立てて勇猛邁進すべき時である。我が國固有の民族精神、生々發展の氣概、道義的健闘の雄志、強大なる同化力を奮ひ起して、我が理想を發揮し、我が意氣を試むべき時である。

—後藤伯爵國民訓—

一八 秩父むら山

前田夕暮

名は洋三
神奈川県の人
歌人

前田夕暮

たたなはる秩父むら山ふもとへの

曠野にいでて人烟を打つ
向日葵は金の油を身にあびて

ゆらりと高し日の小さ、よ

裏富士の巨きなる影野におちて

ゆふべはろく、秋風の吹く

窪田空穂

窪田空穂
名は通治
長野縣の人
歌人

雲海のはたてに浮かぶ焼岳の

細き煙を空にし上ぐる

鳴く蟬を手握りもちてそのあたま

をりく、見つ、童走せ來る

母のこと忘れしといふ子を聞きて

そぞろにも涙我が落しけり

島木赤彦

或日わが庭のくるみに囀りし

小雀來らず、牙えかへりつつ

島木赤彦
本名久保田俊彦
長野縣の人
歌人
大正十五年歿

筆蹟

谷かけに苔むせ
りける休れ木を
息つき陰ゆるわ
れ老いにけり
赤彦

北原白秋

名は隆吉
福岡縣の人
詩人・歌人

金子薫園

名は雄太郎
東京市の
歌人

信濃路はいつ春にならむ夕づく日

入りてしまらく黄なる空の色

谷かけに苔むせりける休れ木を
息つき陰ゆるわれ老いにけり
赤彦

蹟筆彦赤

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと

外の面の草に日の入る夕べ

枯れ枯れの唐黍の秀に雀ゐて

ひようひようと遠し日の暮の風

北原白秋

金子薫園

牛小屋に木の葉みだれて牛鳴きて

ミレが繪に似る夕景色かな

しんかんと日は空にあり落葉を

ふみつゝわが世の久しきを思ふ

吉植庄亮

鳴きうつる森の小禽らけふもまた

朝たくるなべに庭どほる多し

初蛙そこかと思ふ聲ありて

しづけきかもよ春の光は

尾上柴舟

夕近み渚の石をめぐりつつ

潮は静かに波をあげたる

すみまさる夜半の心に堪へがたみ

吉植庄亮

千葉縣の人
歌人

尾上柴舟

名は八郎
岡山縣の人
文學博士
國文學者
歌人

筆蹟

しみみどけふ
降るあめは如月
の春のはじめの
雨にあらずや
牧水

若山牧水

名は繁
宮崎縣の人
歌人
昭和三年歿

月下の山をいってこそみれ



蹟筆水牧

白鳥はかなしからず空の青

海の青にも染まらずただよふ

うらうらと照れる光にけぶりあひて

咲きしづもれる山さくら花

若山牧水

佐々木信綱

竹柏園と號す
三重縣の人
文學博士
國文學者

一九 萬葉集の旅の歌

佐々木信綱

一言に旅といつても、萬葉集時代の旅行は、今の旅に比べては、隨

歌人 宗祇

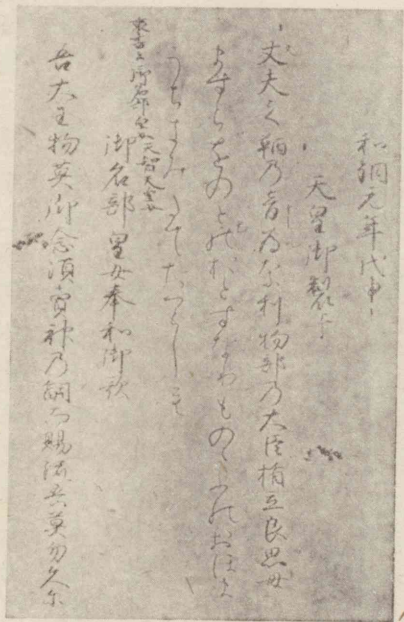
連歌師
路國を遍歴し文
龜二年旅に死ん
だ

分ひどい懸隔のあつたものである。既に西行や宗祇や芭蕉の旅と比べてさへ非常な隔たりをもつてゐる。今はわづかに、信州や奥州の山深い峽や、吉野や熊野の奥などをゆけば、その頃の旅情を如實に感ずる事が出来るであらう。それとも、二三十里歩いて、鐵道に遭遇しない所のない今の世では、山を出て野を横ぎつて、地方の小驛から夜行列車に投じてしまへば、それでもう家へ歸つた様な心もちになつてしまふ。都へはいる前の夜の野宿にまでも旅の心細さを味つた昔の趣とは驚くべき相違である。

おそらくは上代の地方の部落は極めて小さく、これをつなぐ路は、自然のまゝに草木の密生した山野を走つてゐたであらう。田地などは殆ど部落のごく近傍にしか見出す事が出来ない。しかしその部落がまた何里と離れる事がある。遠い旅に、野宿は必ずつきものになつてくる。萱を刈り敷いても露はしとどに上から

おりる。焚火はしても、火はすぐとだえがちになつたらう。しかして暁の寒さのおそふまゝに、眠ははやくから妨げられる。その頃の原始の様を想像すれば、旅が今の都會人のする様な愉樂の爲の旅でもなかつたし、江戸時代以後のやうに、相當に便利のあるものでもなかつた事が分るであらう。勿論彼等は、その旅に相應した肉體と精神の所有者ではあつたであらう。けれども決して旅は楽しいものでは無かつたのである。

しかし考に入れておかなければならぬのは、萬葉人の心である。彼等の健全で、すなほで、さつぱりした男性的な心も、ちは旅そのも



元曆本校萬葉集

のの苦しさを不便さに對しても、彼等をあながちに感傷的にはしなかつたであらう。彼等は雨にあひ、暴風にあつた時の苦しさを、寂しさ、恐しさをうたつてゐる。たゞ美しい景色にふれ、鳥の聲に耳傾けた時の朗かな即興ばかりを歌にしてはゐない。男にあつては、その男性らしい一本氣な情のこまやかさ、又女にあつては、その女性らしい優しい心の悶えをのべて、旅行くものと故郷に在るものとの思を歌つてゐる。

人なみ勝れた肉體と、健全な情感の持主であつた萬葉人は、山野を跋渉しつゝ、眼前の印象に心を取られて無心に足を進めてゐる。しかし、一度ひし〜と孤獨の寂しさに襲はれる時、彼の心は故郷の方に走り、あとに残した妻子の事を堪へがたく慕はしく思ふ。それで、萬葉人の旅の歌には、切な望郷の思が、人に迫るばかり鮮かにうたひ出されるのである。

小竹の葉
萬葉集卷二(柿
本人磨)

小竹の葉はみ山もさやにさやげども

我は妹思ふわかれ來ぬれば

親しい妻に別れて旅立つた萬葉人の素朴な心には、かうした強い別情が湧いたのであらう。満山には笹の葉をわたる秋風が充ち満ちて聞える。旅情はそゝられる。家郷は一步々々に遠ざかつて行く。峠などを越える時、彼はその足を止めて、後の方に思を馳せないではゐられなかつたのである。

しかして、旅もたけなはになると、漸く旅そのものの刻々の印象が深く彼の心に働きはじめられる。そこで始めて、不便な旅は、旅人の心にひし／＼と迫ってくる。ことに野宿でもしなければならぬ時、或はもう今日は部落に到着するはずだとおもふのに、日は暮れかゝつて、家一つ見えない、雨さへ降りはじめるといつたやうな時、人の心は、旅の寂しさにすつかり占領されてしまふであ

らう。

苦しくもふりくる雨か神の崎

さぬのわたりに家もあらなくに

家一つ見えざる野道、それに雨さへふり加つた。苦しくも一氣にうたひ出した心もち、それは、旅、たけなはの中、にゐて、その苦しさを本當にかみしめた氣持である。

家にあれば筈にもる飯を草まくら

旅にしあれば椎の葉にもる

などに、當時の、人と自然との境界のさだかで、なかつた有様が目に見える。萱を刈り敷いて草枕するといふよりも、椎の葉を器として、旅の食事をすますとは、何といふ簡素であらう。何といふわびしさであらう。

さうした旅のま中にゐれば、誰でもが詩人になる。都における

苦しくも
萬葉集卷三(長
奥麻呂)

家にあれば
萬葉集卷二(有
間皇子)

タツカワ

社會生活の對人的心勞を忘れ、心は獨りになり切つて自然の氣息にそのまゝ觸れる。ことに萬葉時代の旅である。勿論、今といふと人里離れた温泉にいつたよりも、もつと人離れした境界であつたらう。心は淨められ切つて、鏡の如くなつたであらう。その時に映る自然の現象は、ことごとくに深い感銘を引きおこさないで、は、やまなかつたであらう。

家さかり
(萬葉集卷七)

家さかり旅にしあれば秋風の

さむきゆふべに雁なきわたる

かやうな深く凄いばかりな旅の情は、湧然として彼等の心にわきおこらないでは居なかつたであらう。そんな場合、直接眼前の印象に捉はれ、旅その事に心が一杯になつて家の事も行先の事も忘れてゐる。それが何かの折に、ふと家の事を思ひ出すと、堪へられない懐かしさが、一飛びに雲を越えて、故郷の上まで飛んで行く。

ここにして
萬葉集卷三(石
上卿)

殊に心のすなほな萬葉人は、この消息に觸れないはずはなかつたであらう。

こゝにして家やもいづく白雲の

たなびく山を越えて來にけり

かうした旅は、その窮迫や不便や、長い間の家人との別離などによつて、一層人々の感情を純一にもし、深めもしたであらう。その頃の旅は、たしかに苦しかつたであらう。しかしそれによつて、人は本當に深く瞬間を味ひ、又それによつて、なほさら深く家を愛する事が出來たらうと思ふ。

—旅と歌と—

二〇 おのが物まなび

本居宣長

おのれいときなかりしほどより、書を読むことをなむ、よろづよりもおもしろく思ひて讀みける。さるははかくしく師につき

本居宣長
三重縣松坂の人
國學者
享和元年歿(年
七十二)

二〇 おのが物まなび

一三九

てわざと學問すともあらずなにと志すこともなくそのすぢと
 定めたるかたもなくして、たゞからのやまとのくさくさの書を、ある
 にまかせ得るにまかせて、古き近きをもいはず、何くれと讀みける
 ほどに、十七八年なりしほどより歌詠ままほしく思ふ心いできて、
 詠みはじめけるを、それはた師に従ひて學べるにもあらず、人に見
 することなどもせず、たゞひとりよみ出づるばかりなりき。集ど
 もも、古き近きこれかれと見て、かたの如く今の世の詠みざまなり
 き。

かくて二十餘りなりしほど、學問しにとて、京になむ上りける。
 さるは十一の歳父に後れしにあはせて、江戸にありし家のなりは
 ひをさへに失ひたりしほどにて、母なりし人のおもむけにて、醫師
 のわざを習ひ、又そのために世の常の儒學をもせむとてなりけり。
 さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄を人に借りて見て、始

父

小津三四右衛門
 定利
 江戸にありし家
 のなりはひ
 江戸大傳馬町に
 あつた木綿問屋
 の業

百人一首の改觀抄

僧契沖の著した
 百人一首の註釋
 書 五卷

契沖

契沖阿闍梨
 難波圓珠庵の僧
 元祿十四年寂

餘材抄

古今集の註釋書
 二十卷

勢語臆斷

伊勢物語の註釋
 書 五卷



本居宣長 (宮脇有慶筆)

めて契沖といひし人の説を知り、その世に勝れたるほどをも知り
 てこの人の著したるもの、餘材抄、勢語臆斷などを治め、その外も次
 次に、求め出でて見けるほどに、すべて歌學びのすぢのよきあしき
 けぢめをも、やう／＼に辨へさとりつ。さるまゝに、今の世の歌よ
 みありきけり。さて人の詠むふりはおのが心にはかなはざりけ
 れども、おのがたてて詠むふりは今の世のふりにも背かねば、人は
 咎めずぞありける。そはさるべきことわりあり。別に言ひてむ。

本居宣長の思へるむねは大方心にか
 らず、その歌の樣もをかしか
 らず、覺えけれど、そのかみ同じ
 心なる友はなかりければ、たゞ
 世の人なみにこゝかしこの會
 などにも出でまじらひつゝ、詠

冠辭考
賀茂眞淵の著し
た枕詞の解釋書
十卷
縣居の大人
賀茂眞淵
遠江國濱松の人
國學者
明和六年歿

さて後國に歸りたりし頃江戸より上れりし人の近き頃出てたりとて冠辭考といふものを見せたるにぞ縣居の大人の御名をも始めて知りける。かくてその書はじめに一わたり見しにはさらに思ひもかけぬ事のみにしてあまりこと遠く怪しきやうに覺えて、さらに信ずる心はあらざりしかど猶あるやうあるべしと思ひて、立ちかへり今一たび見れば、まれ／＼にはげにさもやと覺ゆるふじ／＼も出て來ければ、又立ちかへり見るに、いよ／＼げにと覺ゆること多くなりて、見るたびに信ずる心の出で來つ、遂に古ぶりのこゝろことばのまことに然る事をさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉の説（説はなほいまだしきことのみぞ多かりける）。おのが歌學びのありしやう、大かたかくの如くなりき。

さて又道の學びは、まづはじめより神書（日本書紀）といふすぢのもの、古き

田安の殿
田安中納言徳川
宗武
明和八年歿

近きこれやかれやと讀みつるを、はたちばかりのほどよりわきて志ありしかど、とりたててわざと學ぶ事はなかりしに、京に上りてはわざとも學ばむと志はす、みぬるを、かの契沖が歌ぶみの説にならずらへて皇國の古の意を思ふに、世に神道者といふものの説くおもむきはみないたく違へりと早くさとりぬれば、師と頼むべき人もなかりしほどに、われいかで古のまことのむねを考へ出でむと思ふ志深かりしにあはせて、かの冠辭考を得てかへす、讀み味はふほどに、いよ／＼志深くなりつ、この大人を慕ふ心日にそへてせちなりしに、一年この大人、田安の殿の仰せ事を承り給ひて、この伊勢の國より大和・山城などこゝかしこと尋ね巡られしこと有りし折、この松坂の里にも二日三日とゞまり給へりしを、さることつゆ知らで、後に聞いていみじく口惜しかりしを、かへるさにもまた一夜宿り給へるをうかゞひ待ちていと／＼嬉しく、急ぎ宿

りにまうでて、はじめて見え奉りたりき。さて遂に名簿みちうきを奉りて、
教を承ることにはなりたりきかし。

二 沼地

芥川龍之介



芥川龍之介

東京市の人
文學者
昭和二年歿（年
三十六）

或雨の降る日の午後であつた。私は或繪畫展覽會場の一室で、
小さな油繪を一枚發見した。發見——と云ふと大袈裟だが、實際
さう云つても差支ないほど、この畫だけは思ひ切つて採光のわる
い片隅に、それも恐しく貧弱な縁へはいつて、忘れられたやうに懸
かつてゐたのである。畫は確か「沼地」とか云ふので、畫家は知名の
人でも何でもなかつた。又畫その物も唯濁つた水と濕つた土と、
さうしてその上に繁茂する草木とを描いただけだから、恐らく尋
常の見物人からは、文字通り一顧さへも受けなかつた事であらう。
その上不思議な事にこの畫家は、蒼鬱たる草木を描きながら、一

刷毛も緑の色を使つてゐない。蘆や白楊や無花果を彩るものは、
どこを見ても濁つた黄色である。まるで濡れた壁土のやうな、重
苦しい黄色である。この畫家には草木の色が實際さう見えたの
であらうか。それとも別に好む所があつて、故意こゝろこんな誇張クワザを加
へたのであらうか。——私はこの畫の前に立つて、それから受ける
感じを味ふと共に、かう云ふ疑問も亦挾くわまずにはゐられなかつた
のである。

しかしその畫の中に恐しい力が潜んでゐることは、見てゐるに
従つて分つて來た。殊に前景の土の如きは、そこを踏む時の足の
心もちまでもまさしく、と感じさせる程、それ程的確たつとに描いてあつ
た。踏むとぶすりと音をさせて、踝かかとが隠れる様な、滑かな淤泥かひの心
もちである。私はこの小さな油畫の中に、鋭く自然を掴つかまうとし
てゐる傷しい藝術家の姿を見出した。さうしてあらゆる優れた

藝術品から受ける様にこの黄いろい沼地の草木からも恍惚たる
悲壯の感激を受けた。實際同じ會場に懸かつてゐる大小さまざ
まな畫の中でこの一枚に拮抗し得る程力強い畫は、どこにも見出
す事が出来なかつたのである。

「大へんに感心してゐますね。」

かう云ふ言葉と共に肩を叩かれた私は、恰も何か心から振り
落されたやうな氣もちがして、卒然と後をふり返つた。

「どうです、これは。」

相手は無頓著にかう云ひながら、剃刀を當てたばかりの顫で沼
地の畫をさし示した。流行の茶の背廣を著た恰幅の好い、消息通
を以て自ら任じてゐる——新聞の美術記者である。私はこの記
者から前にも一二度不快な印象を受けた覺えがあるので、不承不
承に返事をした。

「傑作です。」

「傑作——ですか。これは面白い。」

記者は腹を揺つて笑つた。その聲に驚かされたのであらう。
近くで畫を見てゐた二三人の見物が皆云ひ合せたやうにこちら
を見た。私は愈、不快になつた。

「これは面白い。元來この畫はね會員の畫ぢやないのです。が
何しろ當人が口癖のやうにこゝへ出す出すと云つてゐたもの
ですから、遺族が審査員へ頼んでやつとこの隅へ懸ける事にな
つたのです。」

「遺族？ぢやこの畫を描いた人は死んでゐるのですか。」

「死んでゐるのです。尤も生きてゐる中から死んだやうなもの
でした。」

私の好奇心は何時か私の不快な感情より強くなつてゐた。

「どうして？」

「この畫描きは餘程前から氣が違つてゐたのです。」

「この畫を描いた時ですか。」

「勿論です。氣違ひでもなければ、誰がこんな色の畫を描くものですか。それをあなたは傑作だと云つて感心してお出でなさる。そこが大いに面白いですね。」

記者は又得意さうに聲を擧げて笑つた。彼は私が私の不明を恥ぢるだらうと豫測してゐたのであらう。或は一步進めて、鑑賞上に於ける彼自身の優越を私に印象させようと思つてゐたのかも知れない。しかし彼の期待は二つとも無駄になつた。彼の話を聞くと共に、殆ど嚴肅にも近い感情が私の全精神に云ひ様のな波動を與へたからである。私は悚然として再びこの沼地の畫を凝視した。さうして再びこの小さなカンヴァスのうちに、恐し



展 覽 會 場

い焦燥と不安とに虐まれてゐる傷ましい藝術家の姿を見出した。

「尤も畫が思ふやうに描けないと云ふので、氣が違つたらしいのですがね。その點だけはまあ買へば買つてやれるのです。」

記者は暗々した顔をして、殆ど嬉しさを微笑した。これが無名の藝術家が我々の一人がその生命を犠牲にし

て、纔に世間から購ひ得た唯一の報酬だつたのである。私は全身に異様な戰慄を感じて、三度この憂鬱な油畫を覗いて見た。そこにはうす暗い空と水との間に、濡れた黄土の色をした蘆が、白楊が、無花果が、自然それ自身を見るやうな凄じい勢で生きてゐる……

「傑作です。」

私は記者の顔をまともに見つめながら、昂然としてから線返した。
―芥川龍之介全集―

二二 風雅論

徳富蘇峯

徳富蘇峯
名は猪一郎
熊本縣の人
貴族院議員
帝國學士院會員

唯かりそめの旅の空に、同じ汽車の窓より彼方に聳ゆる山々の氣色を眺めたるのみにても、風雅の嗜、有る人と無き人とは、自らその興味を感ずる度を異にすべし。嗚呼、この風雅の嗜こそ、何人にもあり得べくして、又何人にもありたきものなれ。

世には風雅人として、風雅といふことをば我が物とのみ思へる者あり。我が物と爲すは妨げずと雖も、之を我が専有物となさんとするに至りては、大いに不可なり。かの世を避けて、花鳥風月のみ友とする者若しくは詩歌書畫茶の湯插花音楽等の技藝に長じ、

またはそれ等の鑑識に長じたるものの如き、これ等はもとより世の所謂風雅人たるべき特權を有するものならん。しかも風雅の全權を専有し得べきものにはあらず。否、風雅の嗜は何人にもあり得べきものなり。

凡そその境遇の如何に關せず、その修養の多寡に拘らず、すべていかなる人といへども、その優美の心を以て宇宙と人とに接する時は、そこにいひ難き風雅の趣味を感得することを得べし。而して風雅の嗜は、恒にこの心を存して失ふことなからんことを努むるによりて生ず。されば風雅は必ずしも萬卷の書を讀破し、天地神人を究めたる學者にのみ存するにあらず。かの眼に一丁字なき田夫野人と雖も、田畝の間に立ちて、春霞の棚引くひまより遠山の端の夢の如く横たはれるを見て、いひ難き快感をその胸裏に思ひ浮かべたる刹那に於ては、乃ち亦風雅の人たるなり。風雅は又

必ずしも櫻かざして遊ぶ大宮人にのみ存するにあらず。かの心なき賤の草刈といへども、その背負へる草束の間に一朵の花を挿みて、心融々として勞苦を忘れたる瞬間に於ては、乃ち亦風雅の人たるなり。唯そこに必要なはこの心を恒に存して失はざらんことを努むべきと、これを鍊磨修養して愈、その眞醇に近からしむべきとの心掛のみ。

風雅は必ずしも外物に存せず。終生身を珍畫名器の裏に置けども、遂に風雅の眞味を解すること能はざる者あり。必ずしも又技藝に存せず。世には詩人といはれ、畫師と呼ばれ、音楽家と稱へられて、却つて眞の俗物なる者あり。人もし風雅の嗜あらば、その境遇や、技藝や、もとよりこれを助くるに於て大なるべしと雖も、しかも單にこれ等のみによりて、風雅は即ちこゝに在りと斷言すべきものにあらず。かの生田の杜の激戦に、梅花を簞に挿みて、自ら

標識したる梶原景季を見よ。風雅の風雅たる、それこゝに在らん。

風雅の嗜は人の一生をして興味多からしむ。仰いで浮雲の白きを看俯して百花の紅なるを觀れば、吾人は頓に自己を天地の懷裡に投ずる感あり。一片の明月は何人といへどもよく之をながむることを得べく、また富者と貧者とを差別せざるなり。風雅は貴族的にもあり。しかも最も多く平民的に存す。而して吾等は此の風雅の嗜を平民社會に普及せしむることの世道人心を正す上に於て最も必要なを見る。

風雅の嗜あるものは自ら餘裕あり。かゝる人は議會討論の場中に於ても、尙よく襟に挿める薔薇の花を愛する事を解せり。風雅の嗜ある者は自ら氣品あり。何となれば、利害得失の外に心目を快暢ならしむる天地を有すればなり。風雅の嗜ある者はいかなる場合にも楽しみあり。何となれば、現在の齷齪たる社會の裡

蓮月尼
太田垣氏
京都の人
歌人
明治八年歿

にありて、よく宇宙と人との美を我が心に吸収することを得ればなり。風雅の嗜ある者は又よく自ら容忍することを得。何となれば、その暗黒なる一面を見ると共に、必ず他の光明なる一面を見ればなり。蓮月尼の歌にいはいはく、

宿かさぬ人のつらさを情にて

おぼろ月夜の花の下ふし

と。若しかくの如く觀じ來らば、人生何に處してか自得せざらん。世には千金を投じて茶碗を購ひ、萬金を抛ちて書畫を求めて、風流こゝにありと誇る者あり。若しその人にして、眞に風流を解し、且力よくこれを致すに餘りあらば、我等は敢へてこれを斥けじ。然れどもその人にして、徒に器物の末に思を勞して、單にその多きを貪り、その奇を誇らんとすれば、吾等はこれを指して、玩物喪志の志といはんのみ。豈許すに風雅を以てすることを得んや。これ

に反して、廢物破窓のうち、新聞の挿畫を壁に貼り、今戸燒の茶碗にて溢茶を喫する人と雖も、その心よくこゝに存せば、これ實に大なる風雅なるべきにあらずや。

—第二日曜講演—

二三 貧生獨夜

與 謝 蕪 村

與謝蕪村
本姓谷口氏
攝津の人
天明三年歿（年
六十七）

寒氣烈しく候。御壯健御暮し、めでたく存じ候。愚老も無爲消日いたし候。御句數多、何れもおもしろく承り候。浪花御住居の時よりは、けしからぬ御超乘に御座候。當地社中皆々御尊申し出し候。あるが中にも、

足を折つて頭に餘す蒲團かな
愚老三十年前の作に、

頭にや掛けん裾へや古ぶすま
と、佗寢の床に屈伸を定めかね候。足を折つて坊主頭を憐みた

る才覺愚老が及びがたきところに候。
ともし火に氷れる筆を焦すかな
愚句に、

齒あらはに筆の水を嚙む夜かな



畫俳の村燕

几董
高井氏
京都の人
燕村の門人
寛政元年歿
道立
阮氏(本姓樋口)
京都の人
燕村の親友

と、貧生獨夜の感を吐き候。子もまた寒灯に狸毛を焦したる、あ
はれ得難きよき兄弟と存じ候。几董道立君も無事に候。御家
内へ宜しく頼み上げ候。この程は句はなく候。後より可申上

候。以上。

十二月二日

夜半

大魯様

二四 狩野芳崖

岡倉覺三

岡倉覺三
福井縣の人
美術鑑賞家
大正二年歿(年
五十二)

一幅の濃淡、人天相分る。上は即ち無量光明の淨界なり、下は則
ち五欲昏迷の穢土なり。大士の容顏端嚴にして、愁に和して微笑
を含み、左手に楊柳を撚し、右手に寶瓶を傾け、瀉ぎ來る無明空中一
滴慈悲の水は、清魂の人間に歸るを送るものなり。赤子の合掌し
て仰いで菩薩を見るものは、無知清淨にして餘念を懷かず。亂山
突兀、暮雲暗澹、煙冷かに風荒る。憐むべし、呱呱たる阿孺、何處にか
墜下し去りて憂悲煩惱の長夜に迷ひ、那邊の淨地に向つて如意心
蓮を發き、再び慈悲の海に遡るを得ん。嗚呼、これ芳崖狩野翁が畢

生の傑作観音大士の像なり。

翁嘗て人に語つて曰く、人生の慈悲は母の子を愛するに若くはなし。観音は理想的の母なり萬物を發生煦育する大慈悲の精神



牧童圖

(狩野芳崖筆)

なり創造化育の本因なり。余この意象を描かんと欲する、こゝに年あ

り。未だ適當なる形相を得ず」と。

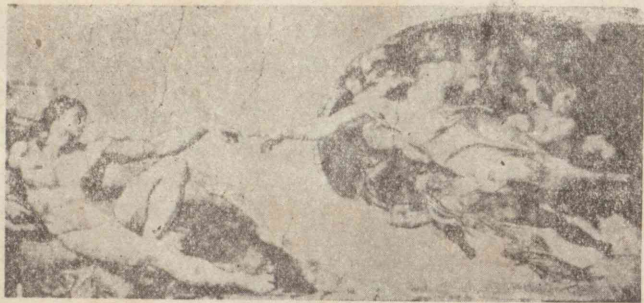
この圖は翁が最終の揮毫に係り長逝に先だつこと纔に四日、畫き了へて未だ款を署するに至らざりしものなり。蓋し翁平生の心事この一幅畫中に留保するものあらん。その筆墨の沈着淳厚

悲母観音 (狩野芳崖筆)



東京美術學校所藏

ミケランジェロ
 伊太利の人
 畫家
 彫刻家
 詩人
 (西紀四七五—一五
 六四)



創造 (ミケランジェロ)

にして、この賦色の明麗渾融なるは近世多く比類を見ず。特に意匠の高尙秀絶なるに至りては、技道に進むものにして、遙かに古人を凌駕せんとす。尋常一様墨を遊び筆を弄し、花天月地に風流三昧を事とするものと時を同じうして語るべからず。彼のミケランジェロの畫きたる創造の圖は歐洲美術の神品と稱すべく、氣力豪邁にして布置雄大、唯見る、雲間の上帝隻手を伸ばして大地を指し、倏忽一個の壯士の現出するを。彼は則ち上帝の命令念力を以て人を創造するなり。是は則ち觀音の慈悲法力を以て人を發育擁護するなり。佛家發生の深理は自ら基督教造物の主旨と異なる所あり。その美術上の形相も、

亦随つて同じからず。人若し畫中の心情を看破し去らば、豈妙悟の天外より落つるなからんや。憐むべしこの超凡の絶技を抱きたる人は、未だ天下に名を成す能はずして、空しく黄泉の客となれり。然れども翁の妙想は、竟にミケランジェロをして美を擅にせしめざりしなり。

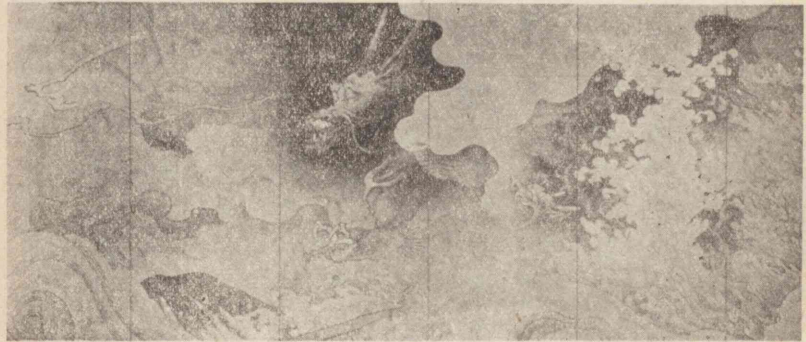
翁姓は狩野、文政十一年正月十三日、長州に生まる。幼名幸太郎。父を晴卓と曰ふ。家世、萩藩の畫師たり。父性豪毅にして、俠氣あり。自ら信ずること頗る固く、その子を訓ふること甚だ嚴正なり。翁が勇邁果敢の氣力は、多く嚴君の鍛錬による。母、溫柔貞淑、その愛育慈養は、翁の常に追念したる所にして、後年觀音の畫ある所以も亦此に基づく所あるべし。翁の豪懷英氣、風雲を叱咤する筆を以て、時として情致纏綿、曉露の海棠に墜つるが如き、一種幽婉の變體あらしめたるも亦故ありと謂ふべし。年十九にして始めて江

戸に來り、木挽町狩野畫所に入る。爾來十有餘年、螢雪の功を積み、狩野門流の正格を鍊磨し、非凡の精妙を顯し、當時秘訣と稱したる師門の口傳の如きも、暗合默會して先輩を驚かし、巍然として畫所屈指の名手たり。安政六年、江戸城本丸焼失す。再建に當り、大廣間天井の裝飾は、翁選ばれてこれを託せらる。然れども翁の心は未だ大いに安んぜざるものあり、一朝自ら悟る所ありて、遂に別天地を開かんとするに至れり。

當時、狩野の畫風漸く衰微に瀕し、粉本摸寫の弊最も盛んにして、周文の遠山に玉澗の雁陣を横たへ、夏明遠の樓閣に仇英の人物を坐せしめ、以て自個の製作となすものあり、當時の一幅の丹青を解剖し去らば、雪舟の樹木巖石、馬遠の蘆荻、夏珪の牧牛、相阿彌の歸帆を點々排列するに過ぎず。畫家の新案に係るものは、纔に雲烟と落款とのみ。翁の洞然大觀して、自ら破格を企てたるは、洵に已む

周文
室町時代の畫僧
京都相國寺の僧
玉澗
支那南宋の畫僧
夏明遠
支那南宋の畫家
仇英
支那明代の畫家
馬遠
支那南宋の畫家
夏珪
支那南宋の畫家
相阿彌
室町時代の畫家

雪村
室町末期の畫僧



龍

(筆 邦 雅 本 橋)

を得ざりしなり。
一日童子あり、戲に虎を畫く。眼はこれ
兩々の丸子、耳はこれ雙々の遠山、足はこれ
四竿の老竹、斑文五六點、鬚毛兩三絲、添ふる
に長大の尾を以てす。翁觀て大いに喜び
起舞して歎じて曰く、「これなる哉、これなる
哉。雪舟の骨、雪村の氣、亦これに外ならず。
畫の要は一意直到、唯心裏の影を以て紙上
の形となすに在り。意盡くる所は、則ち筆
の盡くる所なり。氣力滿盈の間、豈一點の
間筆を着くべけんや」と。これよりして筆
墨を童子に與へ、白紙を以てその畫く所に
換へ、これを祕笈に藏し、夜靜かに人定まる

後、孤燈を剪つてこれを展覽し、畫中の上乘禪に悟入する所あり。
この時に於て翁の心事を解し、共に破格を期したるは、獨り橋本雅
邦なりき。氏は翁と同日畫所に入る。時に年十三歳なりと云ふ。
この兩畫、伯一は雄拔奇豪、一は渾厚着實、共に表裏提挈し、新畫の端
緒を開きたるは、亦奇緣といふべし。
心機漸く熟して、形相未だ成らず、新に生面を開きたる者の通弊
として、忽ちにして奇癖に陥り、怪詭百出、滿幅の風雲魑魅魍魎を奔
らせて、同門の嘲を招き、師家の罵に遭ひぬ。されど、翁自ら信ずる
所あり、敢へて一步を退かざりき。憾むらくは世を擧つて俗陋、翁
を知る者甚だ罕なり。慘澹辛苦、嘗めざるなく、その死に先だつこ
と兩三年、始めてその心機と形相と調和するを得て、畫法の自在を
成したる者の如し。觀音その他の傑作に至つては、畫格遠く古大
家に入り、人をして驚絶せしむるに足ると雖も、その巧妙は既成の

形相に非ずして、寧ろ含蓄にあり未敷蓮華の香を包み、秋雲の雷電を藏するが如し。惜しいかな、未だ大いにその圓熟縱横の妙を揮ふに及ばずして遂に逝けり。享年六十一時に明治二十一年十一月五日なり。

翁、人となり内、忠實温順にして、外、高邁俊逸なり。その父母に至孝、孝養るは郷閭の知る所にして、勝川門下に遊學したる時の如きは、身節儉を守り、潤筆を得てもこれを私せず、郷里に送り、以て父母旦夕の料に供したりと云ふ。技藝の上に在りては、虚心坦懐、好んで人に問ひ、門下子弟の説と雖も、苟も取るべきあれば、喜び拜してこれを容れ、その圖様を改むること屢なり。自ら信じたる所を説くに至つては、貴賤親疎の別なく、長談雄辯して必ず意を盡くさざれば、歇まず。

翁又謠曲を愛し、舞を好む。常に舞法の畫法と同一なる所以を

勝川
狩野勝川院雅信

説き、得意の事、得意の人に遇へば、婆娑として起舞し、傍に人なきが如し。蓋し畫伯の眼中唯畫あるのみ。顧ふに美術の大家たるものは自ら一家の美學を有するものなり。或は心に感じて口にこれを云ふ能はざるものあり、或は默契して言ふを好まざるものあり。翁の如きは之を言ふを喜びたるものなり。翁は畫理を以て天地萬物の眞理を發明せんと、試み、佛家禪僧の妙悟、漢儒西哲の深旨、總べて丹青鏡裏に照映してその意義を判し、得失を論じ、仁義道德の大道、坐臥進退の庸行に至るまで、盡く取りて以て畫訣とせり。翁常に言ふ「人生各自獨立の宗教なかるべからず。美術家の宗教に美術宗あり。復何ぞこれを他に求めんや」と。亦以てその造詣を見るに足るべし。

二五 道長の膽力

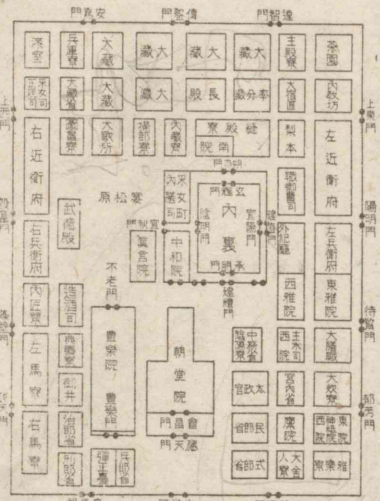
白のなきは、
存絶物語、
天、
鏡、
道長の膽力

四條大納言
藤原公任
關白賴忠の子
大入道
藤原兼家
關白太政大臣
中關白殿
關白藤原道隆
兼家の長子
栗田殿
關白藤原道兼
兼家の次子
入道殿
藤原道長
兼家の第三子
關白太政大臣
萬壽四年没(年
六十二)

四條大納言のかく何事もすぐれてめでたくおはしますを、大入道殿いかでかゝらむ。羨ましくもあるかな。わが子どもの影だに履むべくもあらぬこそくちをしけれ」と申させたまひければ、中關白殿、栗田殿などは、げにさもとや思すらむと恥づかしげなる御氣色にて、ものものたまはぬに、この入道殿はいと若うおはします御身にて、影をば踏まで、面をやは踏まぬ」とこそ仰せられけれ。

さるべき人は、疾うより御心魂のたけく、御守もこはきなめりと覺え侍るは。花山院の御時に、五月下つ闇に五月雨も過ぎて、いとおどろくしくかきみだれ雨の降る夜、帝さうしくや思し召しけむ殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましたしけるに、人々御物語などし給ひて、昔恐しかりける事どもなどに申しなり給へるに、今宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく入がちなるにだに、けしき覺ゆ。まして物離れたる處などいかならむ。さあら

む處に一人往なむやと仰せられけるに、「え罷らじ」とのみ申し給ひけるを、入道殿はいづくなりとも罷りなむと申し給ひければ、さる所おはします帝にて、「いと興あることなり。さらば往け。道隆は



大内裏の圖

豐樂院道兼は仁壽殿の塗籠道長は大極殿へ往け」と仰せられければ、よその君達は、便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又承らせ給へる殿原は御氣色變りて、益なしと思しけるに、入道殿はつゆさ

る御氣色もなく、私の従者をば具し候はじ。この陣の吉上まれ、瀧口まれ、一人昭慶門まで送れと仰言たべ。それより内には、一人入り侍らんと申し給へば、「證なきこと」と仰せらるれば、「げに」とて、御

右衛門の陣
宜秋門の内

宴の松原
豊樂院の北手の
空地

手箱におかせ給へる刀申して立ち給ひぬ。今二所もにがむく
各、おはしましぬ。

子四つと奏して、かく仰せられ議するほどに、丑にもなりにけむ。



(筆齋容池菊) 長道原藤

に、その者ともなき聲どもの聞ゆるに、^{シカハヤリ}ずちなくて歸り給ふ。粟田殿は露臺の外まで、わな、く、く、おはしたるに、仁壽殿の東西の砌のほどに、簪とひとしき人のあるやうに見え給ひければ、ものも覺えて、身の候はばこそ仰言も承らめ。とて各、立歸り參り給へれば、御

扇を叩きて笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかゞと思し召すほどに、ぞいとさりげなく、事にもあらずげにて參らせ給へる。「いかに〜」と問はせ給へば、いとどのやかに、御刀に削られたるものを取具して奉らせ給ふに、「ごは何ぞ」と仰せらるれば、たゞにて歸り參りては、べらむは證さぶらふまじきによりて、高御座の南表の柱のものを削り候なり。とつれなく申し給ふに、「いとあさましう思し召さる。こと殿たちの御氣色は今にも直らで、この殿のかくて參り給へるを、帝より始め感じの、しられ給へど、羨ましきにや、又いかなるにが、物もいはず候ひ給ひける。なほ疑はしく思し召されければ、つとめて藏人して、削り屑を遣はして見よ。」と仰言ありければ、もて行きて、おしつけて見たうびけるに、つゆ違はざりけり。その削り跡はいとけざやかに、侍るめり。末の世にも見る人は、なほあさましき事にぞ申ししかし。^{たといふ事}ありき事

二六 世間を恐るな

夏目漱石

神田
東京市神田區

毎々御面倒相願候處早速神田の方へ御送り下され候由多謝の至りに候。

學校を卒業して一日のうちに世の中が恐ろしくなつたから、これから餘程注意を周密にする由結構に候。

併し周密といふ意味に上等と下等とあり。自己の智力にて出來得る限り考へ、自己の感情にて出來得る限り感じ而して相手と自己とに不都合の破綻なき様にするを上等といひ、唯人を見て泥棒の如く疑ひ、何でもコソコソと先を制する様な事を得意とする、これを下等の周密といふべく候。

君の感じたるは如何なる方面に於ての意味なるや知らざれども、若し前者ならば賢の方へ一步進みたるなり。若し後者なら

ば愚の方へ一步進みたるなり。世上幾多の才子は愚に近づきつゝ、自から賢に進むと思へり。利害の關係なき三者より忌憚なく是等の人を評して見んか學校に居るうちの方が遙かに上等にして、卒業して世の中に居る時の方が餘程下等なり。然も自らは頗るワイズになりたる如く考ふる人多し。是程いやな現象は之なく候。カレコイ

世の中が恐ろしき由、恐ろしき様なれど存外恐ろしからぬものに候。若し君の弊を言はば、學校に居るときより世間を恐れ過ぎて居る事なり。君は家に在りて親父を恐れ過ぎ、學校に在りて先生と朋友とを恐れ過ぎ、卒業して世間を恐れ過ぐ。その上に世の中の恐ろしきを悟らば却つて困る位に候。恐ろしきを悟る者は用心す。用心は大概の場合人格を下落せしむるものに候。世上の所謂用心家を見給へ。世を渡る事は即ち巧みな

自らかへりみて
ラミテホクンバモ
自反而縮、雖
千萬人、吾往矣。
(孟子)

らん。然も親友となし得べきか。大事を託し得べきか。利害以上の思慮を闘はずに足るべきか。沈思これありたく候。世を恐るゝは非なり。生れたるこの世が恐ろしくては生き居るのが苦しかるべし。余は君にもつと大膽なれと勧む。世の中を恐るなと勧む。自らかへりみて直くんば千萬人といへども我行かんといふ氣象を養へと勧む。天下は君の考ふることく恐るべきものにはあらず。存外太平なるものに候。唯一箇所の地位が出来るか出来ぬか位にて天下は恐ろしくなるべきものにあらず。どこ迄行きても恐るべきものにあらず。免職と増俸以外に人生の目的なくんば天下は或は恐ろしきものかも知れざれど天下の士、一代の學者はそれ以上恐ろしき理由を口にせずんば恥辱と存候。勉旃勉旃。

—漱石全集—

二七 舟路

(王 佐 日 記)

九日
承平五年一月
前年十二月二十
一日土佐國出發

土佐
舟路
記

一 別離

九日。つとめて、大湊より奈半の泊をおはんとて漕ぎ出でけり。これかれ互に國の境のうちはとて、見送りに来る人あまたがなかに、藤原言實、橘季衡、長谷部行政等なん、御館より出て給ひし日より、此處彼處に追ひ来る。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれて行く。これを見送らんとてぞ、この人どもは追ひ來ける。かくて漕ぎ行くまに、海の畔に留る人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふことあるべし、舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれどこの歌を獨り言にしてやみぬ。おもひやる心は海を渡れども

ふみしなければ知らずやあるらん

かくて宇多の松原をゆき過ぐ。その松の數いくそばく、幾千年へたりと知らず。本ごとに浪打寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。面白しと見るにたへずして舟人のよめる歌、

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は

ちよのどちとぞ思ふべらなる

とや。この歌は所を見るにえ勝らず、

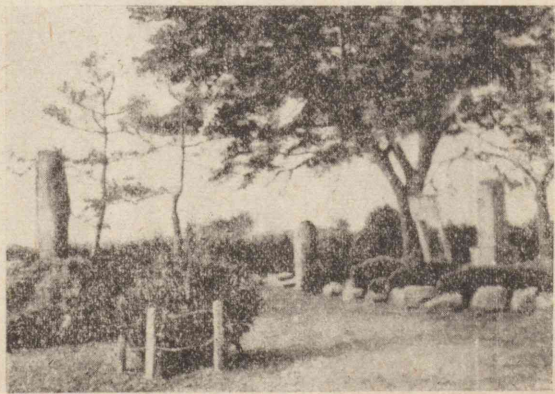
かくあるを見つゝ漕ぎ行くまにま

に、山も海も皆暮れ、夜ふけて、西東も見

えずして、天氣のこと、楸取の心にまか

せつ。男もならはぬはいとも心細し。まして女はふなぞこに頭

をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば舟子楸取はふなうた



(郡岡長國佐土) 址 邸 之 貫 紀

歌ひて、何とも思へらず。

二 海 路

十六日。風浪やまねば、なほ同じ所にとまれり。たゞ海に浪なくして、いつしか深崎といふ所渡らんとのみなん思ふを、風浪ともに止むべくもあらず。或人のこの浪たつを見てよめる歌。

霜だにも置かぬかたぞといふなれど

なみの中にはゆきぞふりける

さて舟に乗りし日よりけふまでに、二十日あまり五日になりにけり。

十七日。曇れる雲なくなりて、曉月夜いとおもしろければ、舟を出して過ぎ行く。この間に雲の上も、海の底も、同じ如くになんありける。うべも昔の男は

棹はうがつ波の上の月を

棹はうがつ
棹穿波底月
紅壓水中天
(賈島)

舟はおそふ海の中の天を

とはいひけん聞きさしに聞けるなり。或人のよめる。

水底の月の上より漕ぐふねの

さをにさはるは桂なるべし

これを聞きて或人の又よめる、

かげ見れば波の底なるひさかたの

空こぎわたる我ぞわびしき

かくいふ間に、夜やうやく明け行くに、檝取等黒き雲俄かに出て

来ぬ。風も吹きぬべし。御舟かへしてんといひてかへる。この

間に雨降りぬ。いとわびし。

三都 歸

十一日。雨いさゝか降りて止みぬ。かくてさし上るに、東の方

に山のよこほれるを見て人に問へば、八幡の宮といふ。これを聞

十一日
二月十一日
八幡の宮
石清水八幡宮

きて、人々拜み奉る。山崎の橋見ゆ。うれしきこと限りなし。こ
こに相應寺の邊に、しばし舟をとめて、とかく定むる事あり。こ

の寺の岸の邊に柳多くあり。或人この柳
の影の川の底に映れるを見てよめる歌、

さゞれ浪よするあやをば青柳の

かげのいとして織るかとぞ見る

十六日。けふの夕つ方、京へのぼる序に

見れば山崎のたななる小櫃の繪も、饅餅まがひの

法螺の形もかはらざりける。賣る人の心

をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行

くに、鳥坂にて人あるじしたり。必ずしも

立ちて行きし時よりは、来る時ぞ人はとか

あるまじきわざなり。これにもそれにも、かへりごとす。



(筆實信傳)

紀貫之

飛鳥川
世の中は何か常
なる飛鳥川きの
ふの淵ぞけふは
瀬なる
古今集(讀人不
知)

夜になして京には入らんと思へば、急ぎしもせぬほどに、月いでぬ。桂川月の明きにぞ渡る。人々のいはく、この川飛鳥川にもあらねば淵瀬更に變らざりけり」といひて、或人のよめる歌、

ひさかたの月におひたる桂川

そこなる影もかはらざりけり

又或人のいへる、

天ぐものはるかなりつる桂川

そでをひでても渡りぬるかな

又或人よめる、

かつら川わがこゝろにも通はねど

おなじ深さにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて來れば、所々も見えず。京に入り立ちてうれし。家に到りて門に入るに、

月あかければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふがひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれひとつ家のやうなれば、のぞみて預れるなり。さればたよりごとに、物も絶えず得させたり。今宵かゝることと聲高にもものいはず、いとほしく見ゆれど、志をばせんとす。

さて池めいて、窪まり水つける所あり、ほとりに松もありき。五年六年のうち、千年や過ぎにけん片枝はなくなりけり。今生ひたるぞまじれる。大方皆荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく思ひこひしきがうちに、この家にて生まれし女子も、もろともに歸らねば、いかがは悲しき。舟人も皆子抱きてののしる。かゝるうちになほ悲しみに堪へずして、密に心知れる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものを我が宿に

小松のあるを見るが悲しさ

とぞいへる。なほあかずやあらん、又かくなん。

みし人を松のちとせに見ましかば

遠くかなしきわかれせましや

忘れ難く、口惜しき事多かれど、え盡くさず。

二八 現代と古典文學

藤村 作

昭和元年十二月二十八日、今上陛下朝見の御式に際して、百官有司に賜はつた勅語の中に、「模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ」と仰せられています。此の如きことは未だ嘗て仰せられなかつたことと思ひます。随つて、昭和新政の御精神として、特に國民はこの點に注意しなければならぬと思ひます。

謹んで惟みるに、我が國民は古來周圍に先進文化國を控へてゐたから、常にこれ等の先進國に擬し、先進國の文化を輸入・模倣して、これに追隨し、遂にはこれを凌駕しようとして來ました。そしてそれがあつたればこそ、斯く發展を遂げて來たのであります。古くは朝鮮・支那・印度を先進國としてゐましたが、近くは歐米諸國を先進國としてゐるのであります。而して同化の國民性はよく是等の先進國の文化を同化して、自ら我が國特有の文化をつくり上げて來てをります。かうして進んで來る間に、何時の間にか、凋落の運命を辿つた朝鮮・支那・印度を遙に凌駕して近世に至りました。さうして、こゝに新なる歐米の先進國に接近するやうになつて、更に彼の文化を輸入して同化に努めた結果は、今や多く遜色を見ないまでに漕ぎつけました。明治・大正の時代はこの努力の中に過ぎ去つたのであります。

世界大戦争以來、歐米の文化は批判される時代に入りました。寧ろ改造の機運を見るやうになつたといふが適切でありませう。そして、歐米人の憧れの眼が漸く東方の文化に注がれるやうになつたと傳へます。顧みて我が國を見ると、餘りに輸入を急いだ結果、輸入過剰に陥り、輸入したものは玉石混淆し、それが又在來有したものと混じて、雜然として、整理統一に苦しみ悩むやうになつてをります。これが精神界の現状ではありますまいか。併しながら、この不整理、不統一の苦惱は恐らく何時かは來るべきものであつたでありませう。我々は寧ろこれを早く受けたことに感謝して、一大發奮を以てこれを突破する大覺悟をなすべきであらうと思ひます。この突破の道は他の模擬を棄てて、自己の創造に努める他はないと思ひます。私は今上御新政のはじめに仰せられた勅語の御趣旨をかういふ意味に於て、誠に有り難く尊く拜するの

であります。

今や改造の機運は世界を通じて漲つてをります。政治、社會、産業、經濟學、問、文藝、宗教あらゆる社會に改造の叫びは揚つてをります。在來のもの、の大きな不備、缺陷を明かに認めて、一層勝れたものにしたといふ要求の到る所に存在する事實は否定出來ません。我が國に於ては、約半世紀の歐米心醉から覺めて、この間に模擬し得た所のものを反省して、茲に大きな不満を感ずるに至つてゐるのであります。永い間の汚れた空氣に酔うてゐる老人でない限りは、皆或新しいものを求めてゐます。青年の改造を求め、新しいものを望む心は殊に熾んであります。

改造の聲の中には唯漫然と叫ばれてゐるものもありませう。新しいものを望む心にも、突き詰めて見れば空漠なものもありませう。併しながら皆さうしたものと思つたら、又大變な誤謬であ

りませう。我が國民は永い外國心酔の夢からもう覺めかけてゐます、自覺しかけてゐます。若い人々は與へられた模擬の文化に酔ふことが出来ないで、靜かに國民自身の心を凝視せんとしてゐます。國民の心の本然の相を見出し、眞に自己の求めてゐるもの何であるかを見きはめようとしてゐます。異國的な香に憧れてゐる青年心理の一面のみを見て、この方面を見逃す人は大きな誤をなすものと思ひます。

「自分自身を知れ」といふのは古代希臘からの金言であります。改造の機運の盛んであり、創造の叫ばるゝ今日に於て、特に永く外國文化心酔の状態を續けて來てゐる我が國民の爲には、この語を繰返すことの必要が思はれます。我々は模擬を離れ、外國の桎梏を脱すると同時に、我々日本國民自身をよく知りたいと思ひます。改造に向つて第一步を踏み出す前に、先づ自身を眞に知りたいと

思ひます。これが本當に外からの拘束を離脱する所以であり、正しい創造に向ふ第一著歩であります。漫然として改造を叫ぶのも愚であるが、改造の名の下に新なる模擬を試みるのも愚であると思ひます。

國民が自己のありのまゝの相を知るに最も恰好なものは、その國民の歴史文學を措いて他にありません。殊に文學はその精神生活を表現したものであるから、國民反省の資料としては最も有益なものであります。國民性を尋ね、國民精神を究めるものは勿論それ等に親しまうとするものに取つても、文學に勝るものはないのてあります。

都市の激しい生存競争場裡に苦闘してゐるものが、偶機を得て生れ故郷に歸るとよし、そこが平凡な土地であつても、何とも言へぬ懐かしい本當の人間になつたやうな感じのするものであるが、

古事記

三卷、元明天皇の和銅五年正月太安萬侶が撰録したもの

萬葉

萬葉集

全廿卷、仁徳天皇の御宇から淳

仁天皇の御宇までの和歌をあつ

めた日本最古の歌集

源氏物語

源氏物語

五十四帖

紫式部著

それが若し山光水色の美に富んだ土地であるならば一層嬉しいものであります。我々がこの繁劇な二十世紀に生きてゐて、古典を読み、古典の世界に陶醉し得た時の心持は、實に心の故郷に歸つた心持であります。殊に我が國は古事記の神話傳説を有ち、萬葉の歌を有ち、源氏物語を有つといふことは、これらが民族特有の精神を表してゐる點から見ても、風光明媚の地に故郷を有するものに比すべきであるから、古典によつて國に對する愛著を感じ、國民精神を眞に我がものと思ふことはまことに深いのであります。愛著と理解とは全くの別物ではありませんから、右の愛著を基礎として、こゝに國民精神に關する理解が深まり、國家國民精神の理解が深まれば、又それだけそれに對する愛著も深くなるのであります。この理解と愛著とを以て、我が國民の生命を生長させて行く所に國民生活の本當の改造、創造が成立すると思ひます。そ

れて我々の古典に親しむのは、唯これを愛するが故に親しむのではなく、古典を讀解するに骨を折るのも、唯その理解に満足を求めてゐるのでなく、我々自身の現代生活を改造し創造する必要の爲に、これを理解せんとし、これを愛するのであると思ひます。現時の古典に對する國民の要求の盛んであるのも、かういふ已むに已まれぬものがあるに相違ありません。

我が國民性の特徴の一面は、直觀的である所にあります。論理的に考へ、推理して行くことよりは、事物を直觀的に知らうとし、又知り得る國民であります。一々分析的に物を究めないうで、綜合的に見る國民であります。古典文學を讀むものは、先づこの點を知つてゐたいと思ひます。論理的に解することも固より必要ではありませんが、直觀的に讀むことはより一層必要であります。文法的に迎ふことも必要であるが、詩的に見ることも、又極めて必要で

枕草子
清原元輔の女
清少納言の著

あります。古事記神話の解釋でも、萬葉集の歌の解釋でも、源氏物語・枕草子の解釋でもさうだと思ひます。固よりかゝる古典文學の眞の會通に達するまでには、論理を辿ることも、文法の法則を當てて考へることも、大切ではあるが、それに止つては我が古典は眞の理解に達せられないのであります。

古典文學の眞の理解・會通はどうしても直觀がよく働き、詩的な見方に熟して來なければ駄目だといふのであります。そこに達しなければ古典文學の眞の意義や「にほひ」は捉へられないのであります。

二九 日本民族の眞純性

河野省三

河野省三
埼玉縣の人
文學博士
國學院大學學長

日本心の清々しきは、日本民族性としての眞純性と、おなじ心性である。このすがくしい、いきくとした、眞眞な性情即ちさわ

やかな心は、日本精神の生活意識として、貴重なはたらきを爲してゐる。明治天皇の御製に、

さしのぼる朝日のごとくさわやかに
もたまほしきは心なりけり



(藏所省内宮) 皇天治明

といふ一首があるが、このさわやかな心といふのは、**豊榮登る朝日**を禮讚する日本民族の深い心性であつて、日神天照大御神を中心とした雄大な建國神話を構成した所以である。いま一步をす、

めて、このさわやかな心と國民性との關係を考察して見ようと思ふ。

さわやかな心——清々しく生々とした廣い心は、即ち快活にし

て眞面目な精神である。この純眞な性情に、基礎を置いた日本民族の固有な道德觀念乃至生活意識は、明・淨・正・直・勤・務・追・進の八字を以て表現される。上代の宣命に「明く淨く正しく直き心とも、單に明く正しき誠とも、或はたゞ明き心とも呼んでゐるが、天武天皇の十四年に制定された冠位の名稱に、この八字が完全に示されてゐる。明・淨・正直は爽やかな心の本質的特性であり、勤・務・追・進はその外部的表現としての行爲であり態度である。明即ち明い心といふのは、明るい晴々した純な精神であり、淨即ち淨い心といふのは清らかな穢れのない美はしい精神であり、正即ち正しい心といふのは、表裏虚偽のない公明な精神であり、直即ち直き心といふのは眞直に片よらない強い精神である。以上の、明く淨く正しく直き心が、即ち精神の最も純な力強い正しい姿であつて、所謂眞心であり至誠である。

さういふ公明正大な眞心は、自ら活動せざんば止まない力を持つてゐる。そこで勤即ち勤しむと、務即ち務めると云ふ二つの活動に移つて行く。務めるといふのは、己れの爲すべき事を自ら爲し、今日爲すべき事を今日爲すのであつて、勤しむといふのは、一歩進んで、務めを済まして更に人の爲に働き、明日の事までも手をつけるところの積極的の行爲である。即ち勤務は共にはたらきてあり、勤勞であり、活動である。活動は修養によつてその内容を充實し、その能率を増進させる必要がある。かくて、追進二様の修養形式が生ずる。追は追ふことである。時勢の進歩に従ひ、他人に後れまいとする普通の消極的修養である。進は更に進んで、時勢に先んじ、他人を超越して積極的に修養することである。修養は活動によつて生きてくる。活動は修養と相待つて至誠を磨き上げる。至誠は活動に意義を與へ、又修養の價値を増すものである。

明淨正直勤務追進は、最も生々とした道德意識であつて、剛健な民族精神の表現である。明るく正しい至誠と生々とした活動と、不斷の修養とを基調とし、根柢とした道德こそ人類の生活を最も力強く堅實に導くことが出来る。日本精神の道德的・生活的表現としての明淨正直勤務追進は、その明るい、爽やかな氣分が生み出した人生そのものであつて、味ふべき深い意義があると思はれる。たゞ日本精神のこの方面は、尙未だ十分に發揮されてゐるとは信ぜられない。剛健なる國民精神の基礎はこゝにある。堅實なる道德生活の根柢もこゝにある。日本精神がこの至誠と勤勞と修養とを、生活の基調として尊重したと云ふ史實を示して居ることとは、その一事でも貴い價值がある。而も靜かに、日本民族の活動した迹を考察すれば、その發展の過程には確にその力と理想とを看取することが出来る。建國の精神に還らうとする者は、併せて

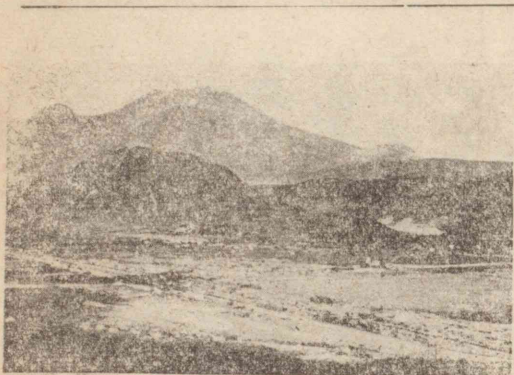
我が日本精神の是等の特質にも深く反省せねばならない。

〔日本精神發達史〕

三〇 坐り

山本有三

山本有三
名は勇造
栃木縣の人
文學者
輕井澤
長野縣北佐久郡
輕井澤町
沓掛驛
長野縣北佐久郡
沓掛町
信越線に沿ふ



輕井澤高原

去年の夏は大部分輕井澤の先の千ヶ瀧で暮した。そこから輕井澤に行くには是非とも一旦沓掛驛に出なくつてはいけない。ところが沓掛と輕井澤との間は街道と鐵道線路とが殆ど平行してゐるので、その間を自動車で通るとよく汽車と競走することがある。ある日自動車で輕井澤へ出掛けた所が偶然うしろから上り列車が追ひ越して來た。運轉手はそれを見ると急に競走意識をわき立

たせてぐつとスピードを早めた。それでしばらくの間は両方が殆どすれ／＼になつて進行して居た。

ところが往來を向うから荷車がとぼ／＼とやつて來た。かなり廣い街道ではあるが疾走したまゝ荷車と自由にすれ違ふことは少し危険だつた。ていきほひこちらは荷車の通り過ぎるまでは速力をゆるめないわけにはいかなかつた。おもはぬ障害物のためにかなり汽車に追ひ越されてしまつたが荷車をやり過すと、いきなり運轉手は猛烈なヘヴィをかけた。私は危く車の中に倒れはぐつた。

「馬鹿に速力を出すね。何哩だい。」

私はよろけながら訊ねた。

「五十哩です。」

運轉手は正面を見詰めたまゝ、吐き出すやうに言つた。しかし

その返事は前から來ないで、車のうしろの方でかすかに響いた。

「そんなに出しちや危険だよ。汽車と競走なんかしたつて始らないぢやないか。あたりまへの速力にしたまへ。」

運轉手は何か答へたらしいが、五十哩の急速力はそれを何處かに吹き飛ばしてしまつた。

私は車の中に下つてゐる帶皮にぎゆつとつかまつてゐたが、それでも幾度か抛り出されさうになつた。その瞬間、嘗て譯したところのあるシュニツレルの短篇「死人に口なし」の一場面がきらつと頭にひらめいた。それは自動車ではないが、馬丁がやけに馬を走らせたために車體を轉覆させた一節である。

しかし幸に何事もなかつた。新輕井澤の近衛公の別邸の前あたりに來た時には、こちらはもうかなり汽車を抜いてゐた。そこまで來ると運轉手は勝ち誇つたやうな態度で速力を徐々にゆる

シュニツレル

オーストリアの

小説家

(西紀八卷) 一五

(一)

新輕井澤

信越線輕井澤

に沿ふ町

めながら平常のスピードに返した。私はほつとした。それまでは車體の激動もたまらなかつたが、それ以上私をおびやかしたものは空氣の稀薄であつた。私はしばしば息苦しさを感じたくらいだつた。一時間五十哩といふ速力は、ずるぶん烈しいものだと思つた。

ところがその後天文のことを書いた通俗の書物を讀んでゐたら、地球は何でも一秒間に三十哩とかの急速度で太陽のまわりをぐるぐる廻つてゐるのだといふ記載が目についた。するとカタといふ間にわれわれはもう三十哩も走つてゐるわけである。一時間なら十萬哩もの素晴らしい速力になる。これに比べたら一時間五十哩ぐらゐのスピードはもの數ではない。それだのにわれわれは自動車を飛ばせると動搖や息苦しさをひどく感じながら、その何千倍もの速さで走つてゐる地球だとそんな不安

を絶対に感じないのは妙である。地球が急速度で廻轉してゐるためにめまひがしたとか、息切れがしたなどといふものはたゞの一人もありはしない。いや、それどころか實際に於ては、地球が動いてゐるといふことさへわれわれは意識したことがない。専門の學者がさういふからはあさういふものかなと思ふだけで、あゝ、今地球が廻轉してゐるなどと氣付くものは誰ひとりない筈だ。今日では教育を受けた人なら最早天動説を信ずるものはあるまいけれども、たゞ見た目の上からいふと、やつぱり太陽や月が動いて、地球は動かないもののやうにしか感ぜられない。非常に速く動くものの方が却つてわれわれに感じないで、それよりは遙に遅いものの方が素晴らしく速く動くやうに思はれるのは實際不思議な現象といはなければならぬ。

この頃の子供はあまり獨樂をまはさないやうだが、私は小さい時分よく獨樂を弄んだ。そして獨樂が非常によく廻つてまるで動かないやうに見える時、わたしはそれを「獨樂が坐る」といつた。行儀が悪く踊を踊つたり、冠を振つたりしないで、ぢつと不動の姿勢をとるところから、さういふ言葉が生れたのだらう。いつ誰が言ひ出したことか知らないが、面白い言葉だと思ふ。

しかし「坐る」といふことは動かないことではない。一見動かないやうに見えるけれども、實は最も烈しく動いてゐることである。最も烈しく回轉すればこそ獨樂ははじめて坐るのであつて「坐り」は活動の絶頂である。

どんなに素晴らしく活動してゐるやうに見えても「動き」が見えるといふことは、力が弱い證據である。動いてゐるといふことはたしかに「動いてゐること」であつて、まだ「坐り」に達しない状態である。そして廻轉が弱いほど動きは一層よく見える。

一時間五十哩の速力といへば、われ／＼には非常な疾走であるが、しかしある意味からいへば、一時間たつた五十哩ばかりの速力だつたからこそ、動きが目立つて、烈しい動搖や息苦しさを覺えたのではあるまいか。地球が動かないやうに思はれるのは、地球が實に素晴らしい勢で廻轉してゐるからである。一時間に十萬哩もの速力になると、獨樂が坐るやうに地球が坐つてゐて、われわれには却つて少しの動きも感ぜられないのだと思ふ。若しもそれが分るやうになつたら、その時は地球の力が非常に弱くなつた時である。いや、そんな時代が來たら、生物は地球の廻轉を感ずる前に、とうに地上から失はれてゐるであらう。(月に生物がゐるのは廻轉する速力が遅いために、求心力が激減して空氣を發散し

てしまふこともその一因であるといふ)

ところが動いてゐるものでなくつては活動してゐるのでないと思つてゐる人がある。

投げられたまゝころ／＼と轉つてしまふものや、少し廻轉したと思ふ間もなく倒れてしまふ獨樂。

心の動くのは力の張りつめてゐない時である。

一生坐らないでしまふ人々。

俳句や歌の方には、動いてゐる句動かない句、坐りどいふことが

ある。

禪門で坐ることを大事なこととしてゐるのはうなづける。

しかし心棒を土の中に突つ刺して、獨樂が坐つてゐると思ふ人があればもの笑ひだ。

坐らうとして坐れるものではない。力がちきれ、勢が昂じておのづから坐るのである。

獨樂が坐ることを子供たちはまた「澄む」ともいつてゐる。

まことに坐ることは澄むことである。

―山本有三全集―

田三
音集邦身

業
帝國新國文改版 第五學年用

昭和十二年六月九日印 刷
昭和十二年六月十二日發 行
昭和十三年一月十日訂正印刷
昭和十三年一月十三日訂正發行

定價金七拾錢



編 者 藤 村 作

發 行 者 東京市神田區西神田一丁目三
株式會社帝國書院

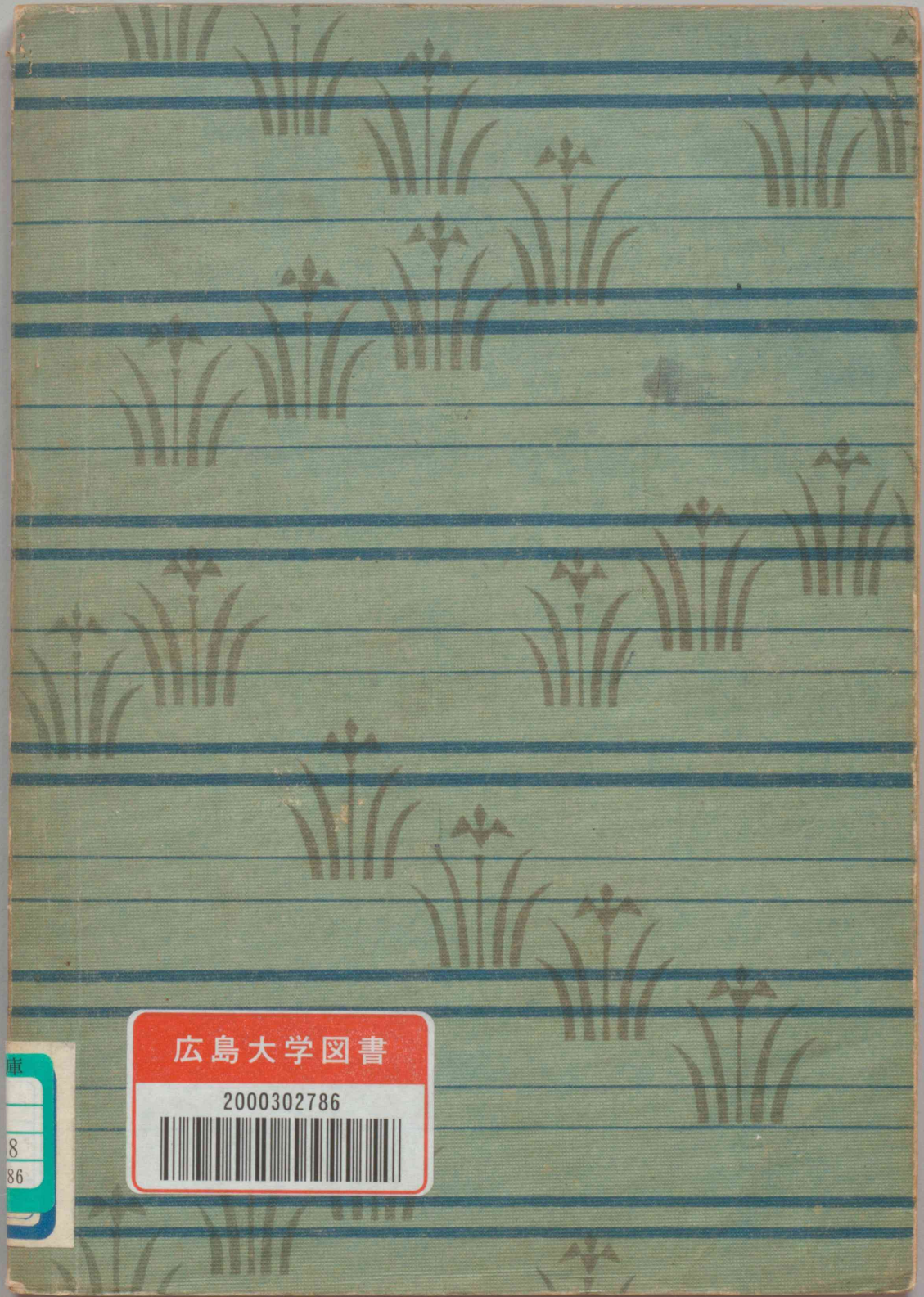
代表者 守屋紀美雄

印 刷 者 東京市京橋區銀座西二丁目三
高 橋 郁

發 行 所 東京市神田區西神田一丁目三
株式會社帝國書院
振替口座東京七二四

關西販賣所 大阪市東區橫堀四丁目三
三宅莊藏書店

振替口座大阪六九



庫
8
86

広島大学図書
2000302786
